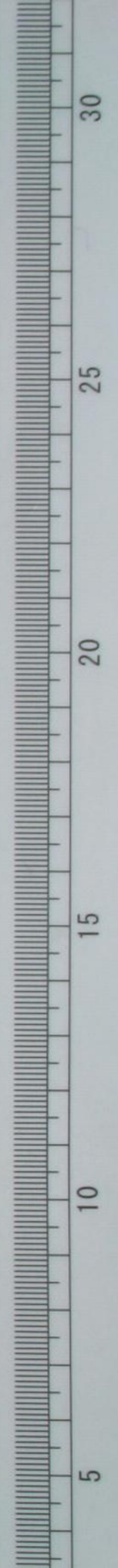




甲戌瑣錄

昭和九年一月起筆

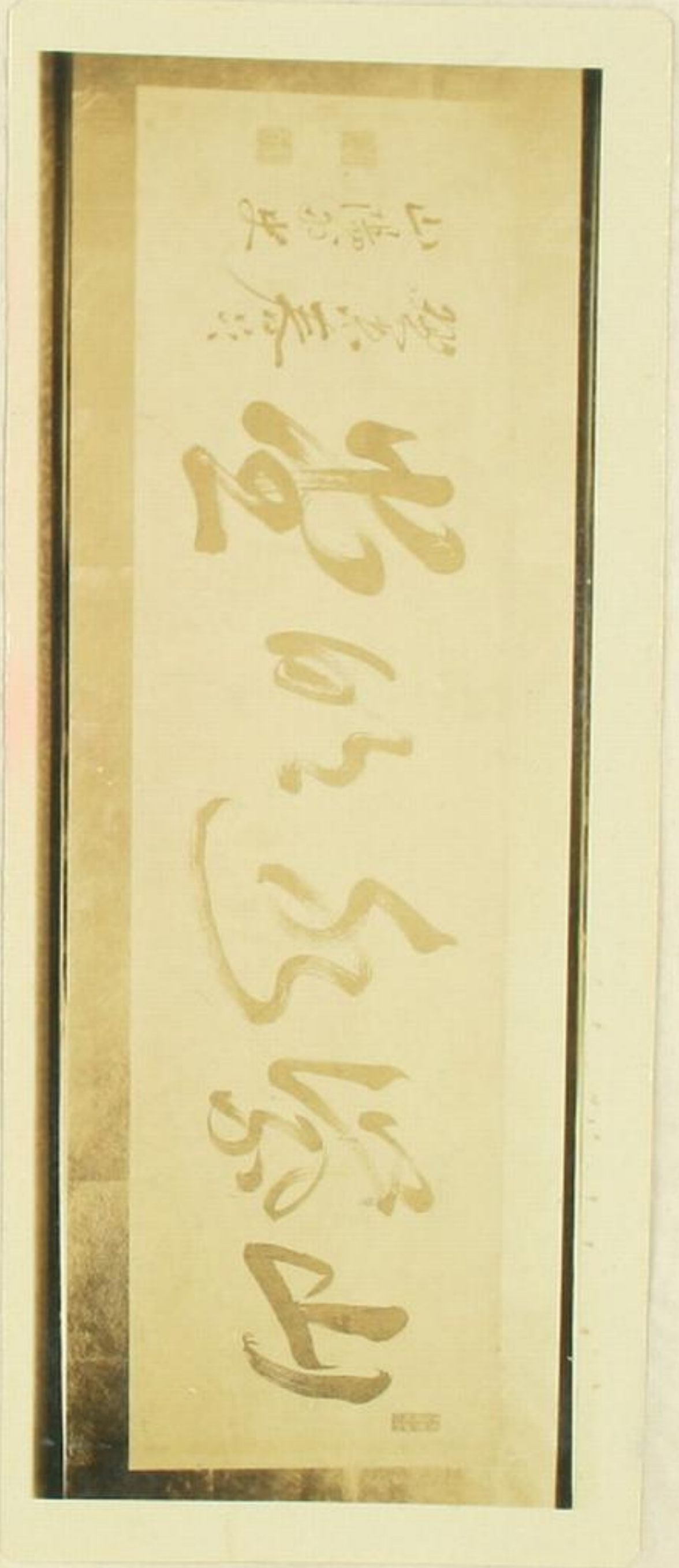
特別
14
1919
456



甲戌現録

昭和九年一月起筆

一昨年昨斗の日載雜誌共々老巻録と書す本
 年老巻の二子を思出、改訂、其一老巻の事、
 吾のそと老巻を許さ、いづかあり
 ○余毎年の除夜に可志の終る一年行事の摘録を附す
 りは例とし、余の摘録亦年々倍し、一昨斗に二倍、昨
 年の予が往後亦うさるを以て、本年亦随後、思出
 可くても也、余、舊を合する、いづかあり、未毎年の除夜
 ことし亦無す、いづかあり、ホットと息するを例とし、本
 年七十五歳を以て、其年、其年の延長、思出、何人



生元を歎きしことをや、時ハこゝに常時杖をたてて
其くまに書か、老人ハ其人の程もあらず、ゆゑに
を懐痛まを得人、其ハ此年ハ倍し七言躍せん所
○新年の首頰閑寂無事、平素の繁劇に似ず、世相の
変化もあらず、昔ハ正月ハ新年賀の行事あり、雪を踏
が一日人を訪ふことが常例なり、由全ハ移けり、十年時
の自分も追憶し七言、あはれと母憶ひ起す、其
末ハ松子士合ハ必しも去上の方、又ハ新年賀の四禮をな
す、この時得たりとえり、南家啓戸を閉し、四礼の役
人ハ御領時合を請ふこと、窮しむるといふ、今七言ハ二
日もテ、パートハ皆衣を脱し、割豆、産七荒干を除る
ハ皆業を休む、此の世れ昔ハ今も異ならず也

標

○正月初頭ハ依り天氣雨、早朝又此の雪の降り、
中途ももうじや、一快とす、珠々、神其うとて、
三言、遠を交す、一快とす、
かく、初ハ、十、
カイレンの神降、証を報する、誰か彼も待ち、
此の、
誰か、
右、
つて、
○、
或ハ、

あつてあることがある。こんな風味と手紙と添くの一語と
でおかしくいふことがあるが、日自人のいふまゝに山陽田が状出芳
とよふと托し物々をきく千紙としは、よふと思つておれが
此二三の山陽の友故一片を拾出し、よふ山陽が朱筆子
のきいしこのを後人がえふと、元脚が後うの状の意
いのを馬鹿にするか、あつてよふの札(名)の友故を状
山陽の添くことかいてあつてをいふ、あつてよふとあつて
還つて元脚が齋くく千紙の友故を二三の
位の(名)を托して、元脚の馬鹿にせんじあつて
郵便をいふくく時代状(名)山陽を氣うくことか
評のあつてこと、初めは感(名)は。
の二三の状とよふと、一二のよふを摘採するに或る人の伊大利



北行に、あつて大理石の山と出候(名)し、此ことが記してある。
■樹木の中心に柱と白い山骨の露(名)んておの山とよふか、マ
ーガル山がある。伊大利のまゝ大理石の豊高の園とよふ
梁材と大理石の多く用ひくく、工(名)品に此(名)は
く用ひくく、七(名)此(名)が(名)ん(名)か(名)地、伊大利(名)マ
ル(名)森(名)刺(名)が(名)多く、其(名)枝(名)が(名)世界(名)に(名)優(名)越(名)して(名)あ(名)る(名)も
此(名)の(名)枝(名)料(名)が(名)あ(名)つ(名)て(名)あ(名)る(名)。目(名)今(名)池(名)津(名)の(名)石(名)を(名)採(名)る(名)
一(名)片(名)を(名)取(名)り(名)た(名)が、石(名)の(名)四(名)角(名)を(名)取(名)り(名)て(名)使(名)う(名)る(名)と(名)あ(名)る(名)。
とよふ。
之(名)可(名)淡(名)方(名)と(名)あ(名)つ(名)て(名)あ(名)る(名)も、此(名)に(名)土(名)産(名)物(名)毎(名)秋(名)流(名)る(名)も
いろく(名)外(名)國(名)の(名)書(名)藉(名)藝(名)術(名)家(名)の(名)傳(名)が(名)あ(名)る(名)と(名)あ(名)る(名)
其(名)中(名)の(名)た(名)の(名)記(名)が(名)あ(名)る(名)

時二九一六年八月三十一日の夜、地中海の大地未だ
血臭きお、英京ロンドンを流る、テムリス河
の架けらんハムマースの橋を、人目を憐り
つ、道を通する一老人があらは、小脚を、一匹の
ハ果をかへ、おどく、此眼を、すく、この
人の眼を憐る、物に、世運の、おそ、な、ふ、ふ、
奥、さ、さ、さ、眼を、以、て、扱、う、は、つ、て、わ、
え、る、こ、と、が、目、を、書、り、を、お、さ、地、方、人、こ、も、ガ、
ス、物、を、不、の、主、少、年、者、と、し、て、或、多、の、信、ん、心、各
を、こ、し、ち、者、物、術、の、世、界、に、偉、大、の、貢、献、を、な
し、ト、ト、マ、ス、ジ、エ、ム、ス、コ、ブ、ジ、ン、サ、ン、ダ、ー、
ン、多、く、人、が、あ、る、也、人、の、者、物、術、の、考、の、苦、心、を、精、良、の



流を、山、の、比、知、る、も、地、方、人、の、殊、々、及、ん、び、或、る、危、大、切、き、
流、を、誰、ん、か、奪、ん、だ、れ、た、か、を、え、る、の、は、海、原、の、彼、ん、か、
事、業、に、共、同、者、の、あ、る、こ、と、を、欲、望、を、な、す、人、年、々、か、ら、な、
り、宗、子、チ、ー、ム、ス、海、を、渡、え、ん、と、河、を、扱、し、り、か、あ、る、皆、
の、彼、ん、が、其、の、流、を、愛、着、の、入、心、が、深、かつ、れ、り、此、一、事、
の、記、を、お、の、こ、と、が、出、来、る、
○地震や洪水や地すくさの如き土壌の衰すこと
といふも、人の眼を逃して土壌が衰化して、
の、を、~~い~~、い、ふ、事、は、論、議、の、事、か、勿、論、あ、る、以、て、自
分、宅、の、附、近、の、以、江、川、改、修、工、事、に、破、壊、す、る、附、近
の、土、壌、を、衰、化、を、生、じ、つ、て、あ、る、こ、の、工、事、に、既、に、一、日、
以、上、あ、つ、て、あ、る、日、前、に、感、ず、つ、た、地、方、の、過、去、の、こ、と、が



此の頃の島、他の一島の三ヶ先
 の長崎を無界紙三枚つりの
 とも也三月の附る年うかき
 と洋行の時脈を定むる書と思
 いたる時脈を論し島の、教の所
 り、胸の海石、ちか也其全又左の
 かし

今出書前何年かの推察ありし
 死出の脈を改心推し、未だ出
 と不冬、今も、今も、今も、今も、
 共著、御読者や提書と存、
 かし

東京市電局

近年の形勢人心垂靡、万法洗々、
 動うと、此の衰、痛、益、未、
 衆とあり、是或、不測、
 各人思、存、回、上、下、不、
 昔も懐、或、海、社、を、以、
 治、不、挽、を、亦、其、由、部、
 時勢、
 此、
 其、
 一、
 二、
 三、

山来支那の書振の事見に行つた其の結果中一冊は
いろく現れぬのが書つては印の如きよか一類の書
は例が多し。却る報解の如きは往々印の如く似の
か書振せんことかあるもの。此の印の本費の
支那の事も報解の如きと考へらるるもの。今
津の事も印影の如き一例も自合七今の報解説を
張るやうな事あり。但し書解の如きと鈕の如きと
まくの事も書振の如きと思ふが、是等のことはいふ
不始の事。

○小島村山の山刻は象陽の雲生郎の持り山陽の記と
せし名をいふもの。是れか今も古松宮のお手入物、一昨
年の或る陣列人等と出あつたものを自合の如き見れば、山



陽の記文も添付せんしあり。どういふに傳へる松室、物
し此かと思つてありしが、山の漸やく有松川家か菊子の
君か宮家か嫁せり、日つきの嫁入道りの一とて撰
書せんはよかあることか。今つれば、有松川家、此等
の物もは経傳ハかゝる。

○吉住小三郎と云ふ名は、四代目とあると云ふが、大
の初代の事と元禄の頃、一人かあるもの。此れ一代の傳
は、此の事、後々芋屋と云ふ元禄の頃、此れ芋屋の事
なり。當時の芋屋、此れ評名せんは、此れ芋屋の事、
芋の稼業を處せん。初の吉村幸次、此れ芋屋の事、
行居六左衛門の門に入り、元禄の名人吉住小三郎の名を
継ぐことあり。此の二代小三郎の事、此れ有松川家

の二重の角兵衛の中の山と云はれりあり「新島田五茶石
荒七」と云ふ一節を引く六左衛門に引くあり
語くても世よことなる様義座を之を引つれば、是れの上
出来りあらむ大いなる名を傳へば、實に十三日以後の米
搦と懇親を伝へ、一井徳利の酒を拵舞ひ、出た米の
きの唄ふのを聞き、大いに得る事があるれば、何れも
風流させしむと云ふ

○上方で昔より高名の茶屋の大坂の若島屋産茶
氏の紅葉屋の品と、清池家の古田有能茶屋の
あり、前者は昭和三年、産茶家の主たる時十八
萬九千九百圓で買取られ、今が作行後五萬圓と
なり、茶葉の最高級の買物である。清の池の古田有



物といふ茶屋の清の池の若島屋の茶葉は優
る茶葉をとり、最も清の池の茶葉は、此の茶葉は
吉原の扇屋守右衛門が所持して、此と云はれ、
るか、古田有能茶屋の品は、後古茶屋の
品のうち、古茶屋が、古茶屋の茶葉は、吉原の
若大屋屋に入質し、此の茶葉の千石、此の茶
葉と云ふ。清の池の茶葉を得るれば、昔より高加の茶
を江戸へ送り、加加の茶の大畫を、此の茶葉の
の名は、花扇を揚げるのめ、此の茶葉を、此の
茶葉の、此の茶葉の、此の茶葉の、此の茶葉の、
ある様、此の茶葉の、此の茶葉の、此の茶葉の、
此の茶葉の、此の茶葉の、此の茶葉の、此の茶葉の、

その律教を以て世に播くことを欲しがる。是れ動
 と不安定な例と拂つて其れをすまふことなつて種々の
 揮法が傳つてゐる。今も其行をある例として其世の者
 におしやうと云司淡い。其書は其法がある。是れを
 觀後にも見ると、誤植の爲に又朝笑の譯名が
 いた聖者が二十餘に別存してゐる。皆キツクよむ
 があるが、ぬる家におつて之れは其味を持ち、誤植の
 聖書のふと其めたり、その多くを所抄してゐるの
 を傳つて、**●**「自死えい」就て解題を心のことき
 お教ふをやるものもあると見ゆる。今左の譯名の附
 してある聖書の教題を其まゝに記す。
 校正の誤りを生じたる邦書聖書

- 一 砂糖蜜聖書 Treacle Bible エリオンと乳香と存するもの糖蜜と誤譯
- 一 南東京島 — Bay Bible 南東島と誤譯
- 一 敗川聖書 Breach Bible 蒙と譯するものブリーチスを敗川と誤譯
- 一 プリス、メーカーの聖書 Place maker コースとねをブレースと誤譯する
- 一 邦書聖書 niched Bible モーゼの十誡の曲甚法をいふものたがひと誤譯
- 一 愚の聖書 Fool Bible 愚々なるもの神と誤譯する

である。

一月十日記

の土中深く埋め込んである礎石に誰のて顧みることある
 せんを振り出して投がさうとも思ふ。唯此我々の殿を
 雲間に往すこのを仰ぎて其の宗廟を移すか
 人情があるか此の飯を打立てるもむさうの苦心か
 あつたか其の往得をまけか、此の涙も涙かまゝのよか
 ある。科学の殿をまじり概して涙を以て築きあげた
 である。今進化論と云ふ、誰れが事とするか、
 事としてまじり流しもあるが、まじり定説とするまじり
 いらん苦心と云ふ。人の概して、ドウ井シの思ふ事か
 否か、其の思ふ、此人と云ふ、五十年前早く此説を唱
 へた者がある。まじりラマークである。此人の多岐の兒の



末弟のまじり佛國の思ふ、何のいとも信じて、まじり
 たりか、奮起して、身命を賭して、起き、まじりの事を示し、
 軍人生活を、まじり、性来植物、其の味か、
 此の十年植物を研究し、其の結果として、其の思ふ、
 此の本が、其の思ふ、保し、彼、植物研究の結果として、
 まじり、まじり、即ち、植物研究の結果として、
 象の象、因、因、まじり、五十年後、ドウ井シ
 の思ふ、まじり、進化論の端、まじり、まじり、
 の思ふ、まじり、人、まじり、まじり、
 思ふ、まじり、其の思ふ、士院、まじり、
 彼の、まじり、其の提案を引、まじり、
 んぬ彼の思ふ、其の積、まじり、三十三年の思ふ、

しつゝおれからいふ。彼人の女の説を或る二三の名人がホシ等
等しく揚げてゐる。爾して終つて研究を續けたと云ひ
ぬ。ダーウ井ンの自序も推量に難くあるが、いま
ダーウ井ンとある感や一轉するが起つた。是の
馬來群島とあるワレスと生れ居るからダーウ井
ンへ字の七ぬ七末に「」の字があるが、ダーウ井ンと説
人と同説がある。ダーウ井ン七説の「」を得る
つ比。此のワレス七マン井スの人口論と後み高島生る
の進化原理のヒントを得た。中にもダーウ井ンと種
種を同ふしてゐる。ダーウ井ンは二十年前から研究
してあり、創作時代を論ずるが、實早らうである
けいも、その頃の「」の「」から、同説がある。

種

「」の「」を手にする。その氣配も、ダーウ
井ン七説の感ふたとあるが、めづるものがある。この
難境に置かるといふ。今「」の「」を「」
といふ人達の「」も「」を「」を「」
つ比。其の結果も人共「」して「」の「」が「」
か「」張りの「」の「」の「」を「」
る。其の「」の「」の「」を「」
糸の「」を「」の「」の「」の「」
し「」の「」である。
學者の其等係を「」を「」の「」の「」の「」
者も多く生活難と聞ひつゝ「」の「」を「」の「」
ラマ「」の「」の「」の「」の「」の「」の「」

おる志恩の西洋の因りこと、又く、センナリは甲午
の醫術者の牛飼の世が一旦牛一疋に罹る天行症に
罹るやいと云ふ事、驗談を山耳に挿入ぬが爲め
の傳信であつたと云ふ、彼人の三愛児、實驗的症
をも試み、終りの醫論と載ひ二十数年の研究を
積んじ終に成功したりある。

○切支丹禁制の爲めおる切支丹関係の文献の皆失
ハル、僅々西洋に在るものと或の龍一或の種を以て酒
を醫する外、まゝの直に殉教時代の研究が或る方面
に行はれ、先が爲め、當つて見ることの出来ぬやうな、恰如
るに、ホツク現る出ても、少年三使節の肖像

三使節

と、渡の支那の著書に、掲げられてゐるが、是れが字の
あるか否や、判然としてゐるが、免て南島より、其の面
かけを思ふよゝん、此恰如の如く、昭和五年吉田博士
印と云ふ人の反譯を、切支丹大名記の巻尾に、
譯者が原書に無の十數のカツトを、ぬのゑある、
れを認ると、んまを、むくして、目、一、をみる、回、も、あ
るが、中、に、ま、や、珍、く、し、い、もの、も、あ、る、フ、ラ、ン、シ、ス、工、大、友
宗、麟、の、畫、像、目、の、名、都、大、徳、寺、塔、頭、瑞、春、院
又、あ、る、に、西、一、の、が、西、洋、人、が、切、支、丹、使、節、と、して、洋、館、の
の、肖像、を、畫、した、が、カル、テ、ィ、ム、の、日、本、画、家、と、花、来、
一、六、四、六、年、の、一、マ、リ、ア、の、收、め、を、あ、る、想、像、を、あ、
る、と、知、ん、だ、お、も、ろ、い、もの、が、あ、る、少、年、使、節、が、乗、船、

曉て舟と別るし國をこ想像給ふあはくは日本より佳和
に無いよむ或る人がパリーの大造面から湯比一枚給
て恐らく切支丹關係書冊の挿給の散後しはくは
がせし。京都に建せんは南唐寺をいふと先を推定
があのれか、そのおせうけと盤が幫するよとその今據は
亦見徳方りいれ存する洛中洛外名不同の扇面一
あはくは、まゝとて道徳部比の町屋の替後と
日本建葉の梅園のよか建つてバテレンの境内を
送しとあはくは、狩會元来の書と云ひれとあはくは、
字があはくは、切支丹の徒を依づめしと轉字を從
しはくは、あはくは、事と云ひあはくは、たして日本に於て
書と云ひあはくは、唯一のあはくは、實永十六年跋の



支利支丹返沈物語、挿給をかくて寛文五年、
刻せんは、徳の給が収めを。又云く
——ところん、あはくは、大久保相模守希奉のしん
洛中、大改、さかひな、き、つけ、あはくは、
入給、あはくは、二枚、あはくは、
くひばかり出しけ、あはくは、
し、ま、あはくは、四条五条のかけん
せん、あはくは、五十五世、あはくは、
祖冊のれ、あはくは、ひし、あはくは、けん、
あはくは、京中をう、あはくは、あはくは、
あはくは、あはくは、あはくは、あはくは、
あはくは、あはくは、あはくは、あはくは、
あはくは、あはくは、あはくは、あはくは、

をおもしろく思ひ、異國書房者十二冊も全部後見し、此の
書中中の傳りなき刊行書のみある。随つて架中
傳ひて長らくをる。二冊の此書の書を扱ひし。其
又未だ、切支冊大長巻も其内の一冊である。この二
イニエシ Stücken の原書及び佛人が四十二年間日本に
在つてカソリワリ教へ傳道をもつた人である。此人は
須田井元彦、秋庭繁盛、洲庭元久、捨井芝園と
いふ著者があつて、いろりの著述もある。元久角日
本であつた。四十二年の長き間、江戸、お茶日本
古怨と通つて書いた。其著述だから、外人の来は
はからせて聞き書きをいふ。ふらふらし。正一のこといふ
まもる。尚ほ他の一書、この二エピソードのプロシア日

異國書房

本通記記のいふ長崎の人か洋教又と譯記さ
れらる。奥書の使節、サイレニブルグ伯のトルコチヤ
来り、及び他の支帳と云ふ。お前坂、日本に着、一八
六〇年九月八日といふ。品川の上陸し、其の王用の修定
條約を結ぶ。あつたが、恰う幕末混乱の時の、攘
夷論が盛んであつた。此の條約を締結する。其
幕府も、四輪の津藩を怒られ、併し、こんど幕府は
前々前々、其の條約が締結せられて、幕府は、
その控作することか出来ず、米のハリスの勅生や、
蘭館命令の件、裁り、幕府は、一八六〇
年十二月十三日、又四輪の津藩、其の正利、其
ハ、終つて條約の高議を行ふ。プロシア、其の

の四体と孰し高嶺が頗る行き悩んだが、幸ふして締結神印
とすべし物結駈我々も洞と奉府にじちをく此條の
二神印し此の如く此河の傍殺吉仲の如くつた、奥使一
行中の通津一人と刺殺すの騒ぎもあつたをたす。
二書と通津の事、後記すこととす。
の差ありしエボリスが江戸湾に入り四圍の風をたす
又もあつた、此の如く、其の二節を左に抄録す。

地回を二見す、日本時、海軍が程々数多の島をよ
つて包んで居ることか、江戸湾の海へ入江とす。
て陸地へ入り込んて居る。此の港の入口に、現る、噴火
山とす。海上に、現る、大島と、和達、の段に、現
る、けし、通津、の、昇つた、太陽の、あつた、照く、さる、



此の如く、光景の、定ま、言ふ、言ふ、ぬ、美し、さ、せ、め、の、此
たう、の、高、さ、一、萬、二、千、四、百、丈、の、火、山、の、守、士、山、の、火、の、上、ま
り、く、い、頂、も、澄、ん、た、朝、露、の、中、に、山、脈、の、上、ま、高、く
現、り、し、て、指、北、が、此、の、山、脈、の、江、戸、岬、か、ら、最、も、突、出、し、た
岬、の、あ、つ、た、を、恰、の、や、う、と、輪、廓、を、畫、り、て、和、達、の、眼
前、に、展、開、し、し、ぬ、也、出、て、長、く、朝、の、星、の、映、み、や、立、に
鐘、の、音、も、山、の、谷、に、響、り、て、居、る、か、や、う、と、思、ひ、ん
ぬ、此、の、風、の、音、の、も、秋、の、空、に、星、の、も、ま、物、も、あ、つ、た、が
あ、つ、た、守、士、山、の、細、砂、の、色、も、す、細、い、鏡、の、輪、廓、を
現、り、て、和、達、の、眼、前、に、横、つ、つ、ぬ、也、悠、々、の、ま、い、り、感、風
の、音、も、其、形、に、柱、を、た、と、く、釣、橋、の、と、ん、た、美、く、し、い
同、鏡、形、の、老、の、山、を、映、し、て、又、此、こ、が、ま、い、し、い、こ、と、

回復したと云ふて、斯く自今、秘傳く語れり、二時を、故法を
交へ此、道迄、こゝろ七十六、年、病多し、元氣、否と、
心、華、花の、殿が、吟、たいと、云ふ、から、自、其、悲、の、集、を、よと
志、共、し、此、が、天、子、大、丈、夫、比、由、り、も、君、を、お、い、て、一、杯、飲、む
ふ、じ、の、之、氣、で、ある、也、何、れ、別、着、の、日、身、押、書、を、頼、ん、じ
二、幅、七、摺、世、帯、と、ん、じ、一、幅、と、波、を、二、幅、も、消、吟、の、曲、中
の、く、せ、く、も、秘、傳、く、語、れ、り、流、の、音、云、々、の、歌、を、か、き、し
他、の、幅、も、紅、糸、を、散、く、く、て、地、摺、紙、と、い、お、夏
紅、糸、中、の、歌、の、書、の、れ、に、お、お、し、ら、し、出、来、じ、外、に
終、ん、じ、よ、う、と、大、直、^宗、中、心、の、一、点、か、ある、こゝろ、
直、迄、の、書、迄、が、出、来、じ、よ、う、と、前、年、も、終、ん、じ、に、
よ、い、外、部、の、酒、東、得、天、真、の、工、の、か、お、の、押、書、を、こ



成り、ある、此、三、三、の、銅、の、ラ、ト、レ、が、あ、り、七、幅、の、一、反、お、し
又、出、来、じ、ある、也、反、お、し、し、し、し、の、約、も、大、き、く、く、の、
又、さ、し、し、酒、折、か、ある、から、字、と、杯、洗、に、用、い、ん、ま、か
る、か、さ、し、し、し、し、の、ラ、ト、レ、を、銀、か、錦、と、七、幅、か、る、
其、の、針、多、也、の、扱、迄、に、出、来、じ、五、幅、と、三、幅、が、あ、る、の、
七、幅、つ、た、去、年、の、あ、ら、あ、ら、山、子、の、同、七、三、幅、を、書、い
七、幅、つ、た、縁、圓、も、ある、から、自、今、の、い、し、し、し、復、れ、ま、ま
芸、園、の、あ、ら、山、子、の、五、幅、一、幅、を、行、な、す、中、に、し、し、し、
三、幅、也、道、迄、の、今、も、勅、の、書、も、葉、山、子、五、幅、七、集、め、
又、い、し、し、徳、徳、と、言、ひ、た、が、自、今、の、あ、の、こ、と、く、も、ん、り、凝
り、性、さ、し、し、氣、根、七、幅、い、と、う、の、せ、い、天、の、也、お、の、自、今、の、
の、前、面、に、新、書、是、と、い、え、ん、家、の、念、を、埃、の、ち、る、く、を、見、い、た、ん

予昔往在山西信陽如鞠津中而為整酒每見
粉聖玲瓏映青海波思是中村氏也中村氏家
業釀酒此傳今美名氣味名酒者稱遠近也
洋南既求此酒購求齊怕誇誇味長其方
法精善也也余亦每得嘗吸為美而不甜
冽而不酸竟洗滌蒸餾為主人稱酒而于南遂
記

天保三載七月晦

山陽刺史口口

口

梅酒

忍冬酒

菊酒

保名酒

不先酒

養氣酒

味淋酒

陳酒

五酒

補酒

右并十卷

中村氏家傳之

最善者壬辰夏

秋之交陽錄

山陽外史口

(備後鞆川太田正巳著)

摩訶羅王子タリシ時餓虎ニ身ヲ與フ是レ推古帝御物玉蟲厨子ノ扉面
ニ畫ケル本生事ナリ塔ノ全形ハ彼ノ厨子ノ形状ニ擬シタルモノナリ
思フニ自己ヲ犠牲トシテ世ヲ饒益スル何ゾ菩薩ト畜生トヲ論ゼンヤ
大悲ノ佛手屠所ノ牛ニ垂レ嚴カニ汝是畜生發菩提心ト唱言シタマヘ
ルヲ親シク拜スルノ感アリ依テ記ス

昭和六年四月八日佛生二千四百九十七年

正三位勳二等帝國學士院會員

文學博士 高楠順次郎撰

史蹟屠牛木供養塔記

下田ハ我國最初ノ開港場ナリ幕末史蹟ノ記念スベキモノ多シ港東玉泉寺ニ米國最初ノ領事館ヲ置ク安政三年ハリス等使節ノ一行亦此ニ館ス國俗會テ牛ヲ食セズ使節命ジテ之ヲ膳ニ供セシム將ニ屠殺セントシ之ヲ庭前ノ佛手柑樹ニ縛グソノ樹幹今尙存ス巨商吉田金次郎岸本國治ノ兩氏沾肉同業ノ有志ニ謀リ樹幹ヲ圍ムニ欄楯ヲ以テシ前ニ供養塔ヲ建テ之ヲ記念ス是レ我國屠牛ノ嚆矢ナルヲ以テナリ併セラ全國ノ身ヲ殺シテ仁ヲ爲セル牛類ノ萬靈供養ヲ行ハントノ大願ヲ發シ塔ノ考案ト造設トヲ斯道ノ達人小林誠義氏ニ托ス印度ノ古俗牛ヲ貴ブ牧牛ハ資産ナリ戰爭ノ要亦牧牛ノ爭奪ニ在リ宗教說話ノ牛ニ關スルモノ亦多シ梵天ノ如意寶牛法華ノ大白牛車祇園精舍鎮守ノ牛頭天王雪山肥膩ノ醍醐味等ハソノ例ナリ佛苦行林ニ在リ一麻一麥殆ト食ヲ絶ツ尼蓮禪河ニ浴シ將ニ昏倒セントスルヤ牧女ノ乳糜ヲ受ケ身初メテ安キヲ得タリ後佛陀伽耶ニ入り菩提樹下ニ正覺ヲ成ズルヤ再ビ河畔ノ林間ニ禪座ス二商主牛車ヲ驅リ至ル牛進マズ商主驚イテ林神ニ問フ曰ク佛悟後四十九日未食ヲ得ズト商主妙蜜ヲ奉ル佛快ク受ク佛本生ニ在リ會テ牛王ト爲ル今牛ノ供養塔ニ釋尊ヲ奉安セル亦故ナキニ非ズ佛會テ婆羅門タリシ時半偈ヲ得ントシ身ヲ羅刹ニ施ス又摩訶羅王子タリシ時餓虎ニ身ヲ與フ是レ推古帝御物玉蟲厨子ノ扉面ニ畫ケル本生事ナリ塔ノ全形ハ彼ノ厨子ノ形狀ニ擬シタルモノナリ思フニ自己ヲ犠牲トシテ世ヲ饒益スル何ゾ菩薩ト畜生トヲ論ゼンヤ大悲ノ佛手屠所ノ牛ニ垂レ嚴カニ汝是畜生發菩提心ト唱言シタマヘルヲ親シク拜スルノ感アリ依テ記ス

昭和六年四月八日佛生二千四百九十七年

正三位勳二等帝國學士院會員

文學博士 高楠順次郎撰



ハリス君記念碑文

昭和二年十月一日除幕式舉行

史蹟屠牛木供養塔記

昭和六年四月八日開眼除幕式舉行

集したるものにして、爲めに資産を傾く、この
紀念館は同氏の身代はりとなり後世まで遊覽者
に接するであらう。この外に清水歸一氏を主任
となし鈴木吉兵衛氏を顧問となす性器崇拜研究



碑面英文意譯 其一

西曆千八百五十六年九月四日、(安政三年八月六日)始めて日本帝國の此一角に領事旗を掲げ、翌年十一月二十三日まで此地に居住し、千八百五十八年七月二十九日江戸條約によりて日本の門戸を世界に開きたる、米國總領事タウンSEND・ハリス記念の爲め、此碑を建つ

*最後に下田を去りたるは千八百五十九年六月三十日なり。

千九百二十七年九月四日

建立者

子爵 澁澤 榮一
故駐日米國大使 エドガー・エー・バンククロフト
市俄古市民 ヘンリー・エム・ウルフ

同

其二

ハリス總領事日記の一節

西曆千八百五十六年九月四日。木曜日。昨夜は興奮と蚊群とに妨げられ、殆ど眠を爲さず。蚊は體軀極めて大なり。朝來予と共に上陸せし人々、予の旗竿を立てんとせしも、竿重くして渉らず、旗竿倒れ、横桁折れしも、幸に負傷せし者なし、終に軍艦よりの増援を得て旗竿は立てられたり。此日午後二時半、一同其周圍に圍をなし、予は此帝國に於ける「最初の領事旗」を掲揚したり。感慨殊に深し。蓋し日本の國情變化の兆にして、更新の端なるべし。借問す。予が思惟する如く、日本の爲に眞に有益なりや如何にと

碑陰の文

安政三年七月タウンSEND・ハリス君の米國總領事として始めて豆州下田に渡來するや、我邦の上下未だ宇内の形勢に通せず、多くは外邦を以て貪婪壓くなきものとせり、君乃ち諄々として貿易の利害を説き、國交の情偽を語り、懇切に幕府有司の啓導に努めて、遂に日米通商條約を締結す。爾後幕府は相次いで列國と條約を締結せるが、皆之を以て標準としたり。當時邦人尙或は此條約を以て、君が權謀術數を弄したるの結果なりとし、憤懣措かざる者ありしなり。尋で君が全權公使となりて江戸に移居するに及びても、幕府は内政益多端にして、外交の事亦甚だ險難なり、之に加ふるに列國の使臣概ね我國情を解せず、往々擅恣倨傲の行爲あり、爲に物議を滋くするの憾なきを得ず。然るに君は常に公平の見を持し絶えず、同情を我れに寄せたり。殊に萬延元年十二月、君の譯官ヒュースケン氏が麻布古川端に於て暴徒の凶刃に斃るゝや、列國公使は幕府の力を外人保護に用ゐざるを責め、各其國旗を撤して神奈川に退去せり。然るに當面の米國公使たる君は、却て列國使臣の行動を不當なりとし其身邊の危険を顧みずして、麻布善福寺の公使館に留まり、平然として日常の事務を見たり。是に於て邦人始めて君の誠意を解し、深く米國に倚賴するに至れり。爾來茲に七十年、兩國親交の渝らざるもの、蓋し君に負ふ所大なりと謂ふべし。是を以て予は嚮に本邦駐割の米國大使バンククロフト氏及米人ウルフ氏と謀り、君が同國最初の本邦駐割總領事として、我領土内に始めて其國旗を掲揚したる下田柿崎の玉泉寺境内に記念碑を建て、以て君の功績を永く後世に傳へんと企てたり。偶大使病を以て逝き、ウルフ氏亦歸國したるを以て、予は獨り事に當りて、終に工を完うすることを得たり。抑予は弱冠にして國事に奔走し、夙に君の事蹟を聞知して、其高風を欽慕すること久し。是を以て明治四十二年渡米實業團に長として彼地に渡航するや、紐育市ブルックリンの古利に君の墳塋を訪ねて、恭しく香花を供へたりしか、時恰も晩秋にして、墓畔の楓葉錦繡の如く故人の丹心と相映するの想あり。低徊願望去る能はず、坐ろに詩歌各一篇を賦して墓前に手向けたり。今此碑を建つるに當り、君の日記の一節を刻して君の當年の苦衷に同情し、碑陰に事の顛末を記し併せて予の詩歌を録し、以て銘に代ふと云ふ。

古寺蒼苔秋色深。孤墳來弔淚沾襟。霜楓薄暮燃如火。留得當年錦繡心。

今もなほ、君が心をあくつきの、夕日にほふ、紅葉にぞ見る。

昭和二年九月

正三位勳一等子爵澁澤榮一撰并書

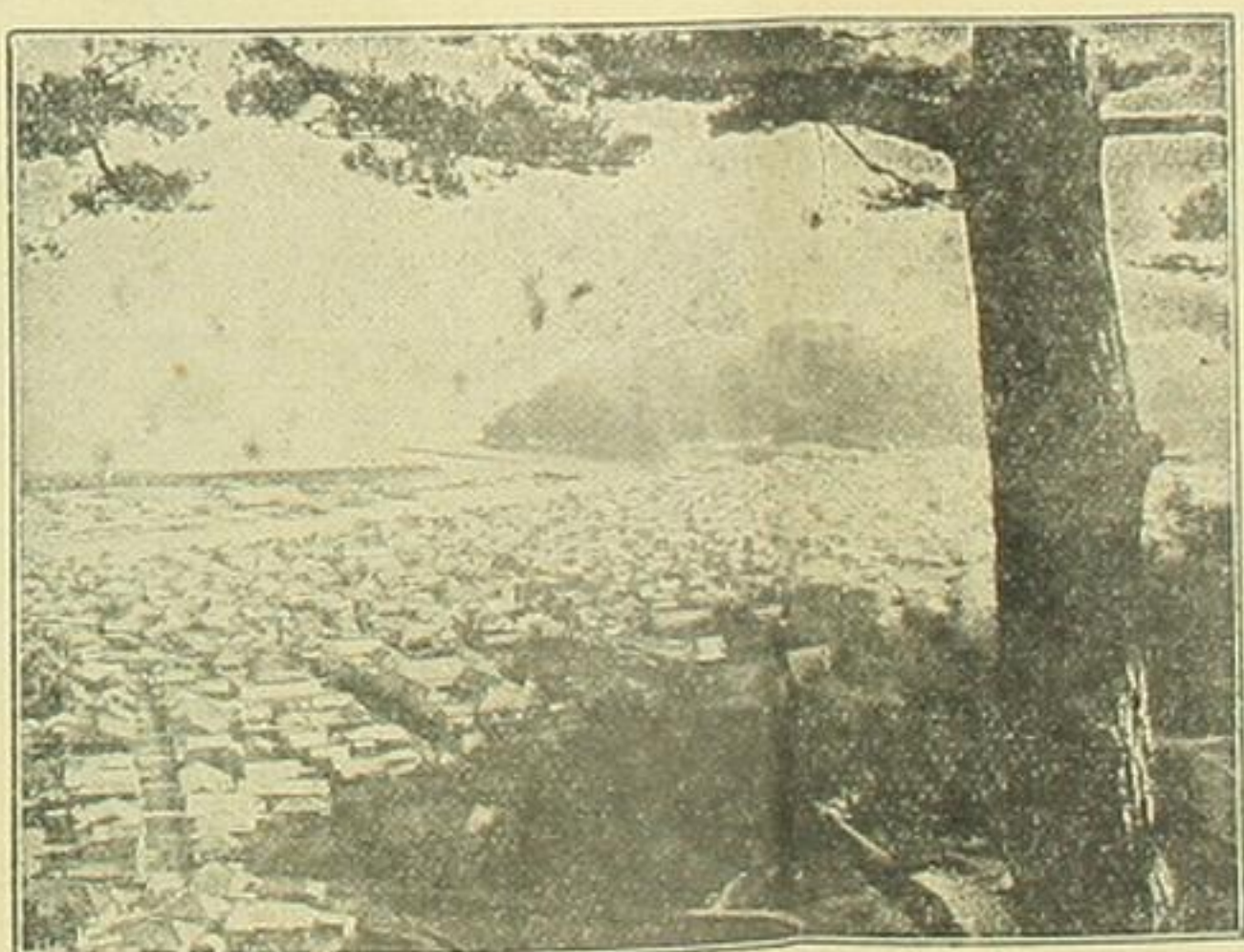
伊豆 下田 了仙寺 史蹟説明

日蓮上人の宗教は勝利の宗教である。いかなる困難を冒しても、一切を自己の信仰によつて感化しなくては止まぬと云ふ熱烈さに於て、又いかなる迫害を以てするも決して自己の信仰を枉げないといふ堅忍不拔さに於て、我が國の佛教中に全く其の比を見ざる信仰本位の宗教である。立正安國の大義名分は現代思想界を肅正し、國家の難局を打開するもの獨り日蓮主義の力と強張する處の宗派に属する南豆の一寺院なり。總本山身延久遠寺の直末にして徳川の始め下田奉行今村正長公の創立にかゝる、三代將軍家光公の時より御朱印を附せられた、松平樂翁公親しく海岸を巡見し國防政策を定むる當時の宿舎に充てられしと云ふ。

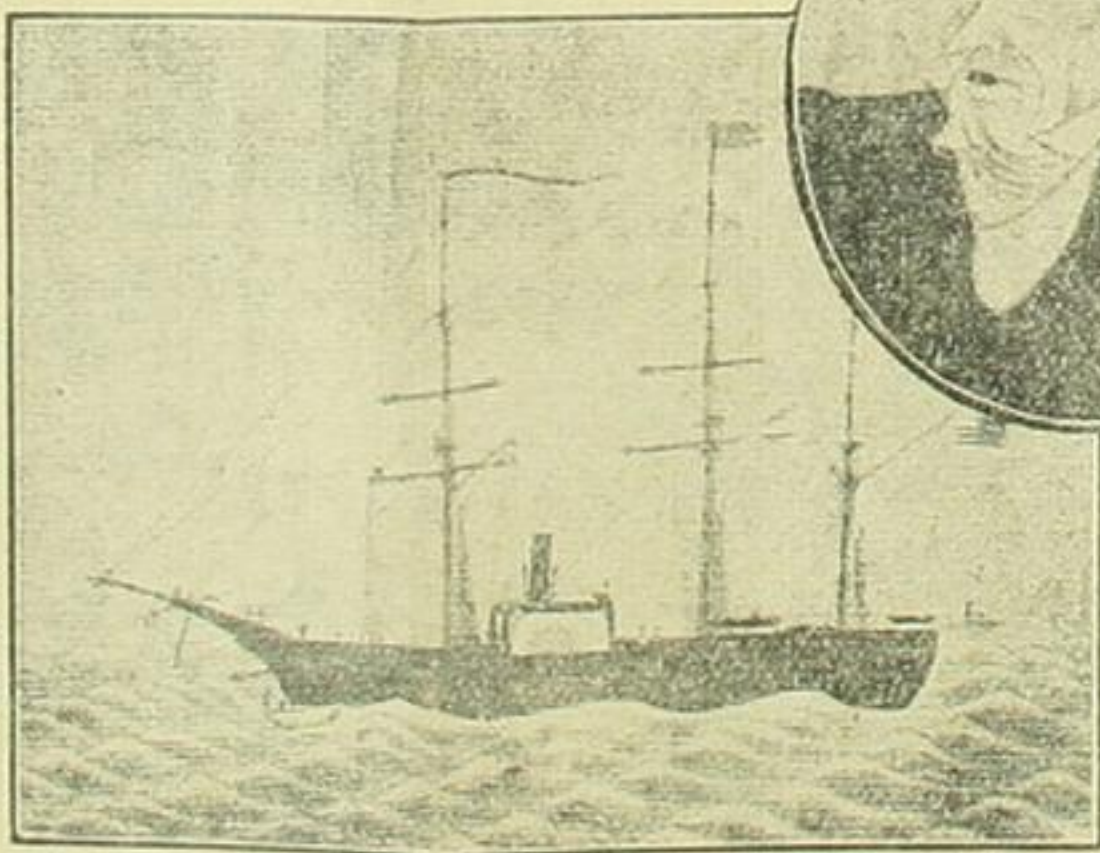
外交關係

西曆千八百五十三年七月八日、我が嘉永六年六月三日に相當し、其の日の午後四時頃ペルリ提督の指揮の下に四隻の米國艦隊突如として浦賀灣頭に顯はれた。當時の日本の國情は何如にも顯象穩かならず空想が益々熱を加へ、餘義なき行掛り上之れと聞ふか乃至世界の共存共榮に入るか、兎にも角にも之れを機會に少なくとも日本は陣容を改めねばならない、四隻の軍艦名はサスクハナ、ミスシビー、サラトガ、ブリマス等で備砲はヤット五十門に足らず、乗込み人員は九百四十人なれば必ずしも優勢ではない、然し當時の木葉船を相手にするには一隻でも澤山である。それが四隻だからスハと云へば即時應戦出来る様砲弾は充填し機關は盛んに動きをつけて居る。哨戒は嚴重だ、殘された問題は發射のチャンスである。一時免れに浦賀條約となる。翌嘉永七年三月十八日、十九日、二十一日の三日間に下田へ米國艦隊廻航し来る。特に廿一日ペルリ親からボウハタン、ミスシビーの二艦を率ひ參謀長アダムス、通譯ウイリアム博士及び美術家ハイネー、旅行家テラー提督の甥ペリー等と共に入港す。三月廿三日ペルリ一行多くの士卒を隨ひて上陸す。黒川嘉兵衛は通詞森山宗之助を伴ひ了仙寺に案内し後一行と共に町内を巡視した。ペルリ遠征記の一節に「下田で一番大きいた了仙寺と云ふ寺がアメリカ人の使用に指定せられたが本殿と離れた客坊の空室同然で何等の設備もないから椅子や其他の物品を軍艦から運んで来て住み心地よく飾り立て、而して日本人の目を訓らす爲め提督や士官はシバシバ此の駐在所に來りて近傍の景色のよい處や背後の森の中などを散歩したり、又愉快の遊びを催して船中の骨折りを慰めた」これより日米外交の幕は開かれ交渉に交渉を重ね談判は開始されたが双方意見が天地の差ありて仲々に一致点に到達しない、兩國の代表者は林大學頭、井戸對馬守、伊澤美作守、鶴殿民部少輔、松崎満太郎その出たちは伊達羽織に小袴着、提督、ペルリ書記官長、ペリー副將軍、ブカナシ士官長、コンチン通詞、アダムス博士等であつた。四月十日ペルリはサツプライ一隻を残し他の艦隊を率ゐて下田を出發したのは下田と一緒に開港することになつた函館を親しく踏査する必要があつたからである。五月十二日米艦は前後して約束の如く歸港した。全月十七日頃は外交上仲々秘術をつくした頃であると想像される。十三日には只今で云ふ示威的運動と見る事が盛んに行はれた。記録に依ると「この日ペルリ大に威を示すべく大砲四門と三百余人を引卒し軍樂隊廿人を壹組八人を壹組先頭に上陸して了仙寺に於て訓練に名を借りて大に威を示した」斯くて下田條約十三ヶ條議定せられた次第である。

其の月廿五日に交換が濟みヤット大難關を突破して一安心して翌廿六日了仙寺に於て大宴會が開催され、日米關係當事者は勿論、皆々參集互に歡びを交はした。ペルリは來港の重任を果して歸國の準備にかゝり六月一日と二日に下田を退帆した。安政三年七月廿五日最初の米國總領事であつたトウセント、ハリス一行も日本政府の大饗宴を始めて受けたのもこの了仙寺である。そして日本食の美味にして華麗なること豫想以上と激賞した記事の如きは特に面白。



下田港全景



黒船來突！如下田に港せしべル共乗船

史蹟訪問者の特記

近來文明の發祥地を訪問せらるゝ人多くなり來たれり。特に大正十四年四月六日米國大使館員一同と共に史蹟訪問としてエドガ、エイ、バンクロフト大使下田全町大歡迎の下に見へられ歸館後任職への禮狀の一節に「兩國の關係は數十年前了仙寺に於て開始せられてより漸次發達して常に其當時に劣らぬ親交をつけて今日に及びたり」云々。

大正十五年六月十八日、伏見大將宮殿下を始め奉り若槻總理大臣外各大臣文武官四十余名史蹟御訪問せらる。

昭和四年七月廿八日、澄宮殿下、朝香宮殿下並に學習院生徒百余名と共に史蹟御訪問遊さる。

昭和五年一月十九日、内大臣牧野伸顯男史蹟訪問せらる。

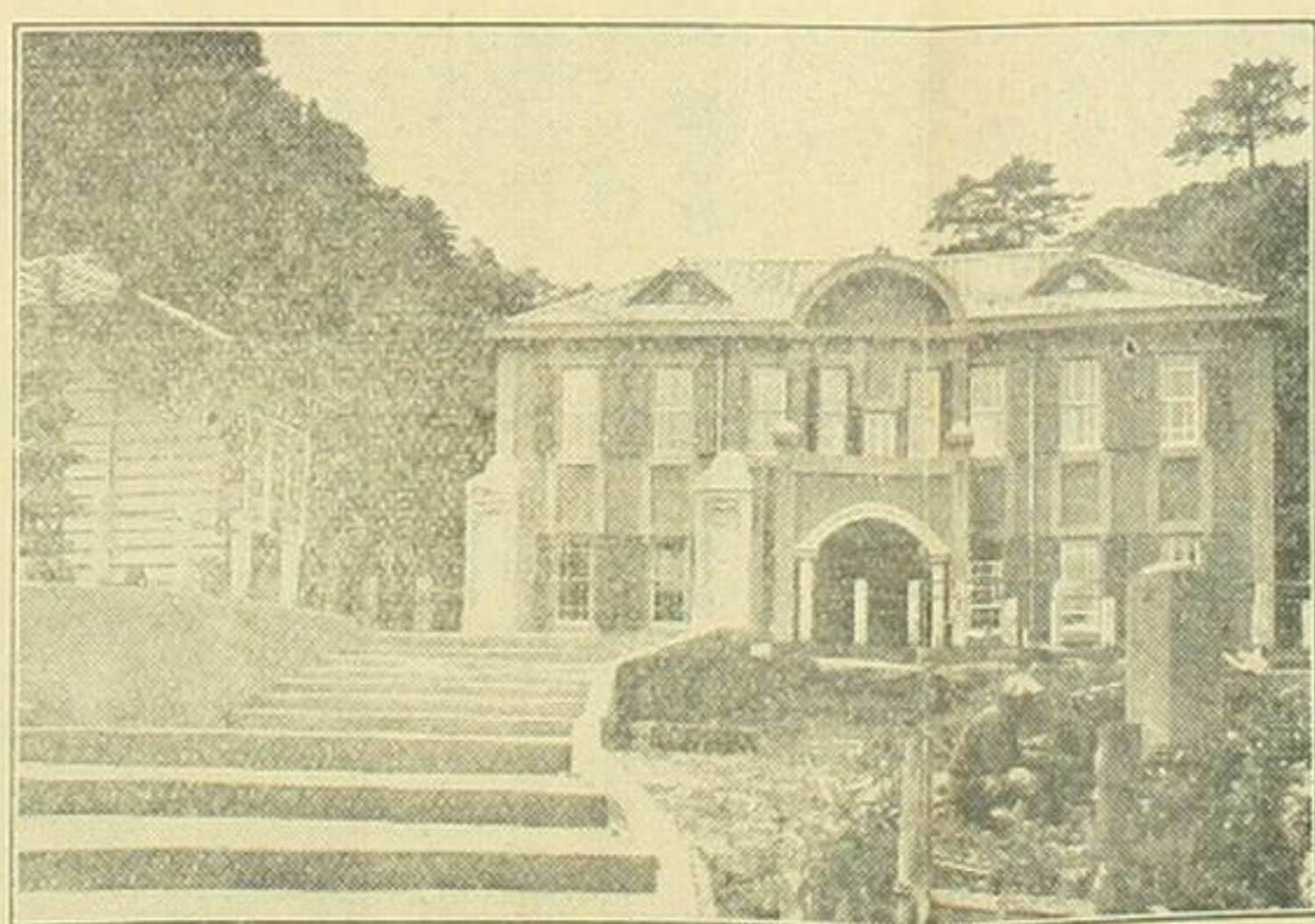
全年一月卅一日總本山身延久遠寺法主杉田日布祝下開港紀念の史蹟は自山の末寺なるを幸ひ御訪問の上特に國禮會を度修せられたり。

全年八月廿八日、小泉遞信大臣一行全様御訪問。昭和八年四月一日山本内務大臣一行全様御訪問。全年五月九日小山法相全様御訪問。

境内に建設せる開國記念武山閣

昭和五年五月了仙寺住職清水歸一及び檀家總代下田の舊家鈴木吉兵衛氏と協力し數萬金を投じて下田に一名所を加ふ開國記念武山閣これなり。

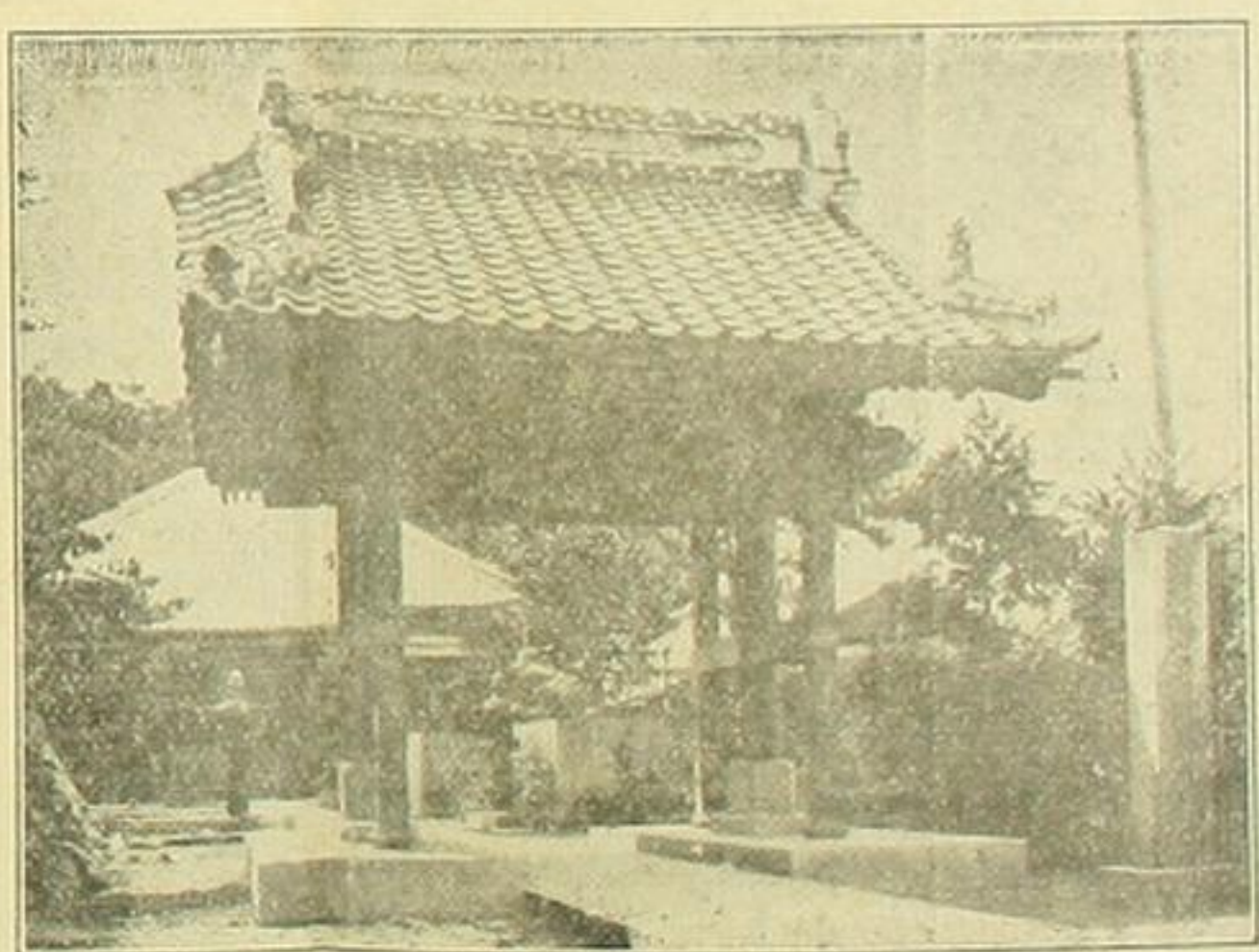
陳列の種目、了仙寺の什物、開國紀念品、集古美術品、日本、支那、印度、朝鮮、ビルマ、西藏等佛像、唐人お吉等外種々陳列しあり。以上の佛像類は頗る珍重に價するもの多し。鈴木吉兵衛氏斯道に興味深く寢食を忘れて全國に蒐集したるものにして、爲めに資産を傾く、この紀念館は同氏の身代はりと成り後世まで遊覽者に接するであらう。この外に清水歸一氏を主任となし鈴木吉兵衛氏を顧問となす性器崇拜研究俱樂部がある。一名秘密室即ち不公開の別館を申すので、これには古今に渡る性器崇拜に關するコレクションで我が國としては他に其の類がない。然し歴史學、人類學、比較宗教學上貴重材料として世に定評あり。今や日本にこの種のもの皆無の際參考の爲め見學も必要と認め下田に來るもの近來特に多し。



武山閣全景

静岡縣伊豆下田港

法順山 了仙寺



了仙寺

伊豆 下田 了仙寺史蹟説明





市島春城氏著 「春城代醉録」

郷土史料としての興味

村島 靖雄

私は廿年以上も圖書館の仕事に携はり、随分いろいろの圖書を取扱つたが「代醉録」などいふ珍書名に出會つたのはこれが初めてである。この書は市島春城先生を中心とする春城會の人々が先生の酒盃に親しまれ過ぎることを憂へて

吉例豪華名優納
歌舞伎座正



先生を促がして執筆を乞ふたものである。即ち春城先生から云へば酒に酔ふ代りの著述である。およそ世間には酔代を諷ぐべく願ふ書かき人は多しはくはないが、酔はぬ爲めに願ふ書いた人は、私の所聞では未だ他にその例を知らぬ。但し春城先生が本書執筆中、果して絶対に酔はれなかつたか否かは、詮議立てする方が野暮である。

一休後には日本有数の大國でありながら史料の比較的乏しい國柄で、殊に幕末から明治初期にかけては一層甚だしく、私の如きも先年本縣教育史の編纂をうっかり引受けたところが史料の缺乏に際して限口してある有様である。然るに本書には新編における洋學の開祖、澤村の外國方洋田前のことや、新編學校の状況や、新編田洋學校最初の物師久保氏等の來任事情などについて、従来史料の説き及ばざるところを明かにしてをのみならず、澤村の代官が建てた水原の温故堂の沿革に關する史料の如きは私の多年搜索して遂に



西園寺公と東條琴ととの關係について、選話や三浦宗孝と佐久間象山の詩、鹿秋水の傳、市島家の回漣業、高野竹隱が新潟に遊んだときの逸話など何れも皆貴重な郷土史料といはねばならぬ。

今日越後出身東京在住の名家は随分數多いことであるが常に郷國の事を思ひ郷土の史實の闡明に多大の關心を持つて居らるゝ人といへば、先づ入澤達吉博士と市島春城先生とに指を屈すべ

きであらう。入澤博士が非常に繁忙な生活を送つて居らるゝにも拘らず其の間に在つて猶ほ且つ郷土の史實を研究せられたることは私がしばしば仄聞して敬服措く能はざる所であるが春城先生の郷土史研究熱といふものは尚ほ一層旺盛で其史眼といひ、識見といひ、押しも押されぬ我が郷土史の大家である。

我越後人士の中にも早稲田大學功勞者としての市島鑑吉、隨筆大家としての市島春城の名を知つてゐても郷土史家としての先生を知らぬ人は少くないやうに思はれる。「春城代醉録」は著者獨特の隨筆集として讀者人の歡迎をうくることは勿論であるが同時に本書はわが越後の貴重な郷土史料であることの特筆して郷土史家の注意を喚起したい。(中央公論社發行定價一圓八十錢)……(寫眞は書齋における市島氏)

○皇太子の誕生を祝福するの書と寓しを
高松局に

人形を扱ひた序と一事も所存す今次は河津在平
一日下回を往復したること前も扱ひたがう仙寺
を冬詣りし時寺附の老木に古田杉陰の木眼や
漆を塗つておた。所謂「農民藝術」の一面は松
陰のけいこ味を感ず。 扱ひてゆくり、一月五箇
の秘録に映る獨酌の折、漆も古干上と可き
こんと一杯の酒を献して此の無言の先輩を得
人形、自今、獨酌主義といふが、往々お手のまひ
のを傳ふ、流りともいふ、この扱ひ、人形と扱ひ
すも一毫比と感はれ。

一月十七日録

○扱ひ、湯がの日正月の七種漸や、こき冬に、川松
をふり拂ひ、之を海岸に運ぶ、一毫ある流次の扱ひる

河津

：及ぶ余也来の特論を説く、門松を扱ひ、日本の習
俗を尚ば西洋よりリストマス、トリーを設けると一般
舊日習一概に非とすべし、なまは、いんも、生長半金の
松を伐り焚すり、不任痛も考へ、せうも得ぬ、よま松
を中葉以上の家ぬす、松と竹とをの昔に、まつを例
とす、都下、年首松井を焚く、ま、米、と武許
を、ん、厚、價、文、の、り、を、量、の、紙、を、安、し、其、の
紙を竹の末枝の條大さ、或は行、我、う、森林を益
病、す、る、こ、ん、こ、ん、を、害、の、文、化、の、為、と、い、う、く、定、て、恐
る、へ、ま、紙、の、及、料、為、り、犧、牲、に、代、せ、る、木、材、か、あ、る、
唯、此、の、為、め、ま、く、の、松、井、を、伐、り、作、す、い、
ん、七、亦、犧、牲、と、い、う、を、得、ぬ、樹、木、保、護、の、片、を、い、

案するを能うず、自分の案するを、各戸に門松を此のこゝとせや
め、一村若くは二町共同一と其の入口着くは、高き坊子
に大規模の門松を此のこゝ如何、舊慣沿ふる所、
可く守とせん、如斯くも一海、又女、和や、自今、此の年、
テ、ハート、三階と連ぬく程の大、ソリ、スト、マ、ストリ
ーを見て、其の親、愉快を感じ、此が、銘、さ、お、又、納、り
の門松を此のこゝと共同して斯く大規模のものを、
亦、此、海、の、も、あ、り、利、巧、の、も、あ、り、と、思、ふ、を、祈、つ、也、

○此素新、旧宅や友人、此に、梅、す、心、細、く、感、ず、る、が、今
亦、御、友、度、井、一、の、計、に、梅、す、度、井、の、早、稲、田、大、学、の、前
身、在、り、の、前、校、の、才、一、の、生、か、自、今、が、御、里、に、政、治、軍
動、を、一、に、決、め、る、の、友、人、が、あ、る、彼、人、の、其、所、か、政、治、好、む、も、あ

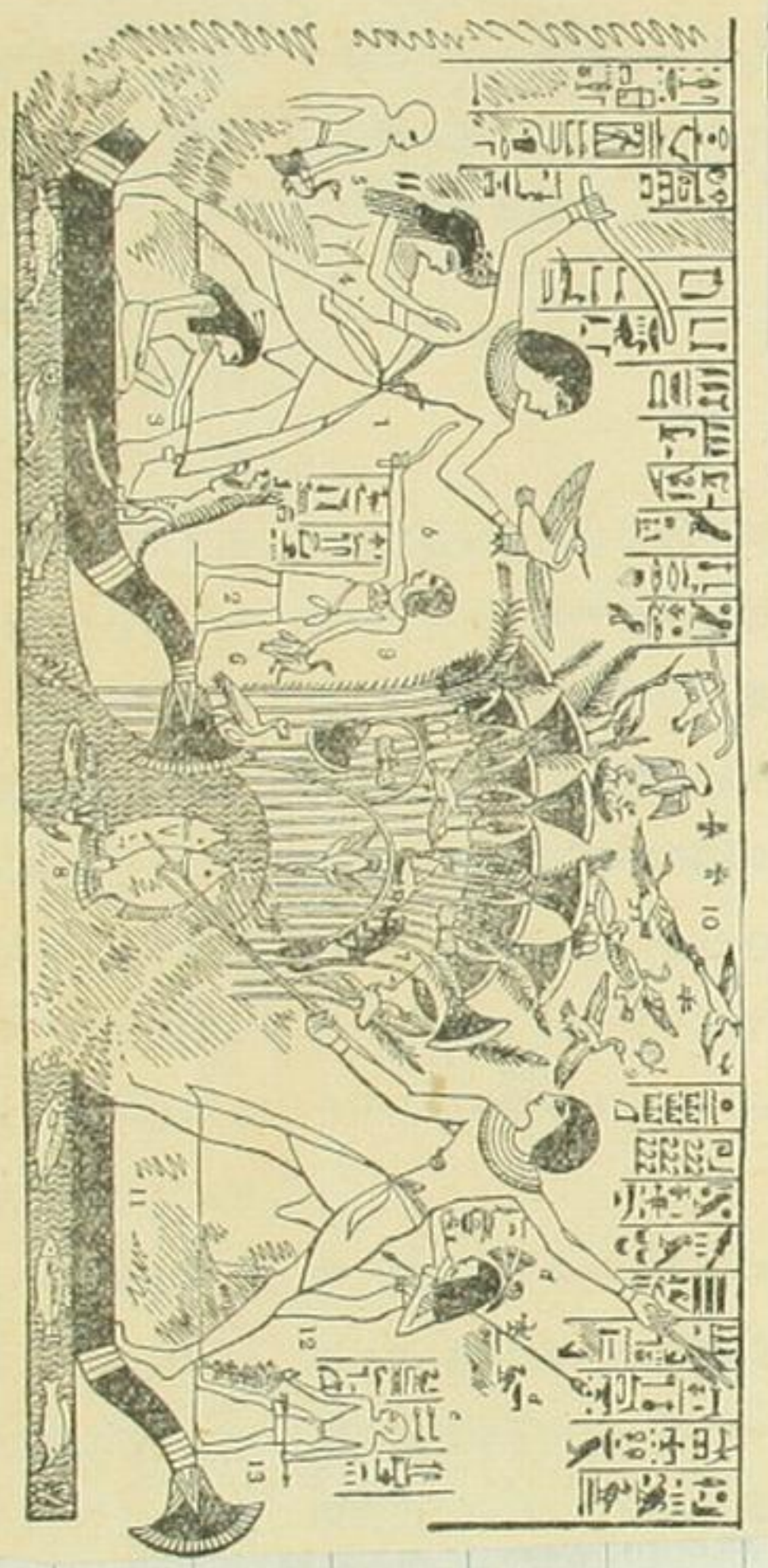
明治

つに、地、元、長、を、此、の、新、校、を、起、す、の、起、り、を、起、す、の、
為、成、り、の、校、を、起、す、の、起、り、を、起、す、の、起、り、を、起、す、の、
遂、に、銀、行、市、格、を、執、り、晩、年、に、此、紙、の、校、の、社、長、と
する、と、終、つ、に、政、治、の、め、の、一、回、も、泉、源、院、に、入、り
か、自、今、の、創、設、に、此、紙、の、在、職、時、代、氣、の、ま、ま、の、紙、の、か
ら、追、い、ん、だ、彼、ん、の、健、望、定、性、の、性、格、を、持、つ、に、此、の、活、動
主、義、の、以、て、の、つ、る、も、あ、り、押、し、進、き、ま、ん、が、為、の、在、職、換
を、し、た、や、う、の、あ、る、地、紙、の、報、立、十、年、祝、典、に、い、ろ、く、自
分、と、其、の、中、年、を、奉、奉、と、迎、へ、ろ、う、と、祝、典、の、終
り、に、終、つ、に、女、に、親、友、が、由、許、謙、を、起、し、た、い、ん、こ、も、あ、り
必、竟、儉、約、の、現、の、い、か、あ、つ、に、い、ろ、く、免、角、紙、の、市、格、を、
と、取、つ、た、の、う、の、儉、約、家、が、多、く、活、動、に、ま、か、活、動、に

訓諺侮蔑の辭ははらうと何ぞあるか、その術家のことを
 解して人間はけなきもの人間は感服しきもの、野の
 獸の本色をまはさぬからんと言ふもの、猫の相態も態
 も優しいものもあるが、其の心は虎又もである。その家猫
 の自我の本色があるからんと言ふのが、あるもの、説くべき
 があるが、何れ人間と眼を欠きいづまひて悪性を有
 するからんもの、言ふ者の説く所は古と曖昧である。
 一説は猫は多くを食ふと、重人のせえんは、言ふべき
 何れあり忘去の、鼠の害むある、鼠の、皆その強敵
 ハ、猫のあつからんとよふて、大昔の埃の、猫と珍重し、
 為る埃の、言ふを、猫のあつからんと、猫を珍重する、
 リ、之れを崇拝し、猫が死ぬるが、其持する家族の眉を刷

猫の相態

つて吊鐘をまき、木乃伊として之れを祀るもの、今日
 りて、この埃の、或る方面は、猫の崇拝か、このこと、
 亦、猫の儀傲の性愛や、我儘があること、ハ、崇拝や
 亦、まやかしの為め、犬や、やう、人間は、眼を欠き、
 亦、あつからんと、まき、言ふ、猫と、七思、いん、ま、
 一説として、猫の相態



舟中の舟の方左、繪るとを鳥水て、舟を舟中に中の輩人及埃代古 圖七第
 (作の代時朝玉八十) るみてれやせに足の間人が脚

かあつた、本は改拂と云く、木賃あり、あるが、何れ大名に何の、
ら何れも、推考する、六、木賃を拂へ、よりのいある、
本は改拂のそと、の起り、いん、ある。大名も、うろく、校給
の掛、うろく、うろく、存心と注かせ比。ある大名を、い、掛か
出来ず、合せ、い、ある、と、ま、こと、その、い、公、う、け、を、い、
いつ、い、待、つ、て、も、ある、と、い、誰、い、も、来、う、ろ、く、い、い、
こと、も、ある。

昔、い、位、階、で、武、法、つ、い、か、ら、公、家、の、金、か、さ、う、と、も、武、家、と、
七、威、幾、い、道、中、い、む、ブ、ツ、つ、か、さ、と、武、家、の、皆、う、あ、け、比、公、家、と、
多、う、之、の、癖、い、ど、こ、か、の、旅、の、ま、う、と、ま、う、と、多、う、掛、か、馬、座、い、
多、い、の、い、い、道、い、か、り、る、固、つ、比、公、家、の、商、家、と、結、託、い、
高、る、と、い、と、公、家、の、為、物、い、と、運、ん、だ、か、ら、い、い、ある。右、の、評

武家

から、武、家、と、い、ふ、百、人、出、ん、だ、い、を、二、倍、七、出、給、い、仕、末、か、つ、
か、ら、か、つ、比、と、い、ふ、大、名、の、龍、を、う、懸、い、甚、だ、い、あ、り、と、多、う、い、体、
合、相、い、馬、氣、い、早、と、出、男、い、比、也、い、ま、え、候、候、候、時、間、い、板、の、
と、う、う、り、比、か、い、あ、り、と、い、重、合、地、公、龍、傳、い、七、人、を、固、ら、し、比、
が、大、名、移、り、い、控、え、比、後、誰、と、も、い、い、き、い、あ、り、と、い、高、付、大、名、
の、行、列、い、必、し、い、お、駈、か、い、露、拂、を、い、八、人、は、見、取、い、出、り、こ、と、
い、る、つ、い、わ、れ、が、い、え、り、い、無、賃、い、あ、り、い、い、え、り、と、い、右、人、と、い、年、か、つ、
と、い、に、こ、い、ふ、

東、は、道、の、島、の、と、金、を、い、あ、り、大、井、川、の、帯、い、二、尺、五、寸、と、い、い、
尺、五、寸、と、い、い、と、川、を、い、と、川、紙、い、川、紙、い、川、紙、い、川、紙、い、川、紙、い、
の、も、り、を、掛、止、い、と、い、川、紙、い、川、紙、い、川、紙、い、川、紙、い、川、紙、い、
の、い、帯、の、い、文、書、を、い、入、れ、比、海、舟、紙、書、い、川、紙、い、川、紙、い、川、紙、い、

敬供を護す、既に冊子とすよの左の四冊あり

本亦名家手行

名家手行改法志辨

小物塵籠助雜交

名家手行雜交

此等の冊子に収められた所数百紙に及び予の師友の
跋七部あり、此は坂口五峯の詩行(名家朱批)
二冊、法蘭田紙、其の詩行一冊、亦此の部類に
属す、次者、匣塵を採りて名家の草行書、
勢よくして後頁を要せざるよの教十(あり)乃
て、別に集して冊子に貼付、置りて名家手書雜
交の(續)とす

昭和九年一月廿四日

○寛政版に法列中より、(四)人形、長短異なる、前日
習見前々、聊に記するに、(五)より、更に、再、冬
観前四より、(五)より、(六)より、(七)より、(八)より、(九)より、
か、坊内塵籠とす、(十)より、福祿壽角能の大人形、
片山義雄といふ人の詩行、(十一)より、(十二)より、
て、法大を、(十三)より、(十四)より、(十五)より、(十六)より、
愛と云ふ、陶物也、外に、大なる人形、(十七)より、神田の祭祀
に、飾りたる、熊坂の像あり、(十八)より、(十九)より、(二十)より、
用ゆる、柳、(二十一)より、(二十二)より、(二十三)より、(二十四)より、
花も大なるよ、(二十五)より、(二十六)より、(二十七)より、(二十八)より、
の門の模、(二十九)より、(三十)より、(三十一)より、(三十二)より、
家の、(三十三)より、(三十四)より、(三十五)より、(三十六)より、

す、公家の家、誕生あつた際有職向の小兒の枕前、
飾りの付も見え、一室、殊に注意を惹き、
の嗚呼、日々に荒廢、赴きつゝある農村、
さう農民、彼等も、考する、さうする、彼等も、
剛ひん、さういふ、無、上憲政下に、
人の思深、添して、あつた、彼等、投票する、
代議士、農民の敵、
の敵、あつた、彼等、因つて、選挙、
政黨、
所、農村の救護、あるが、
餌、
農村の採取、
政黨、

政黨

が威信を失つて、
の離脱、
今農村代表、
総数、
四百六十五人、
か、
蝕、
ハ、
者も失、
二、

いかに多しぬ、貧苦の割に子女を養育してやつと首つ
とまんが農村に居るぬ、此の氣の毒千萬のこゝろに
資本主義者、跋扈の如く居る。資本主義者は、田
舎に金儲けのつらさを設けて、農民の儲金を
握めて高利に吸収して之れを都合に集める。農民
が金を儲けようとする時は、利子も利息も多くと
拂はねばならぬ。又農民が金を儲けようとする時は、
お城の資本家が、農民が儲けようとする時は、
とまると反対に、お城の資本家が、農民が儲けようとする
農民は、資本家が、多く搾り取り取らんぬ。資本家の
以上の差額が儲けようとする、生産物と都合に、
運ぶ、運輸、税関に掛るぬ、此の税関も



亦資本家の後けてゐる所、運賃も亦資本家の儲
けは、搾り取りぬ、往々運賃の、農民の生
産物、金と搾り取りぬ、更なる課税の方面も
又、此の、小工業者と農民との間、大なる不均衡がある
うか、今得る、と、農民、課税、を、便利、不
産物を、搾り取りぬ、此の、市、の、税、の、賦、課、換
れ、此の、農民、の、割合、を、苦、を、云、い、ぬ、田、舎、に、此、の、
苦、を、搾り取りぬ、便利、を、多、い、ぬ、小、工、業、者、の、者、多、い、
を、多、い、け、れ、サ、ン、ク、現、在、を、多、い、ぬ、代、議、士、七、抵
其、の、由、義、を、多、い、ぬ、関係、を、多、い、ぬ、不、均、衡
の、課、税、を、多、い、ぬ、或、る、者、が、大、正、十、年、の
市、面、漁、の、漁、を、多、い、ぬ、と、多、い、ぬ、の、を、多、い、ぬ、

福崎の浦に於て方氏がるの税金を出すゆゑに高き
あり四十五、五、三十一であると言ふは不
均衡も甚しいと言ふを得る。大体農産物の天
候も豊凶のありまは、農民が力かして、
天候をたのむも、出束す、早天の為ら、
多量の税金を、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、
力かして、備へる税金を、
金の轉換を、
よ、も、才、一、次、の、税、知、る、
の、民、り、難、い、
重、い、税、を、
ハ、

以上のこと、考へて、
ある。米價が、
村、
日、
ある。喜、
利、
と、
う、
の、
自、
ら、

の餘裕があるから、彼等が貧乏のどん底に落ち、苦しむ自
然自足で行つたが、今のさういふ行かまい、世界の不景氣を
云へば、それがすなはち、或る程度まで、直ぐは、若くは、
人びとの、其の相場が外圓に下る、と云ふこと、
待す、直ぐは、大暴落を生じて、若くは、
のさばる、都立の、
ていんち、
九日も、
く、
海軍、
と反抗、

彼等

士官が、
米本、
海軍、
言、

日本の農業、
が、
十、
い、
の、
理、

か出来て、その價が著しく低減して仕事は困るやう
なことがある。是れ組合組織を以て農家の思ひの
ことをやるのむづろーカに志せやえぬ。副業を
いふもまじい充分な心と志を以てする。何れ統制が
なされるか。此頃の交産運動が高農家から起つ
てのが、之は農家の産物組合と交産するのむづ
ろ。併し産物組合がやると力を有する。此頃の
を証するものがあるが、之は産物組合の資本主義
の機構の外なるものから、農家の困窮を徹底
的に救済するもの資本主義の第一革命を要
する。農家の負担を著しく減じて資本主義者の
占領する大なる果樹を課税をうする(こと)

昭和十三年

労働が興へる点み行く者打倒に意を注ぐ
る。

「さき坊いさしきまつて

酒の家の山はままつた。

と念付主のまつれば後か

一茶のものをくと外へ出て来た。

一茶の千尋もこれきくい飯櫃が持参もあつた。

此人七つばしどかく飯を貰ひて行くと見え。

ふんをえつげると良寛坊。

つかくと後房りをして。

そと一茶も白つてまつた。

かしこお前とよる念ひもあつた。

一茶の黙つておれ。

「うけんは私に米を進せよう。わいもえんむもまつ

ル米が主人やふ念ひあつた。

えんむも一茶の黙つておれ。

一茶のけげんもする換ふる眺めは良寛坊は

誰のまゝあつた。

「こりや、どうも、ある人間がわい」とおぼろむまつた

とて

ハツハツハツハツと怖やかな笑つた。

一茶もえんむも念ひをいじりて「さき坊の」黙つた

又さういふ

「まてこの時頭はなあ

とまつて

「フワフワフワフワ」と笑つた。

御座る和歌心、殊に校歌園歌を必す能
かちつて早稲のちの校歌も清風の心つれ所があること
と和歌のこのやうな味いどこか淵源はかと思ふ
と、左の事実は、かえを語つてある、思ふと校歌を
この新体歌の如く流流から流したよと思ひん。

京都府所載各校在る中、校法や新体
軟文のものを投書し、おを以て者武重義の校歌
に觸れ、故校河を、意に、これ、真下流を
邪を、形、お、ま、お、人、お、人、か、ま、く、の、新、体、詩
と、ゆ、り、に、中、の、ま、ま、と、不、朽、と、さ、う、つ、て、あ、る、軍、歌

校歌

こゝにおおむを何する

君の志きいぬ

春は夕日と照らす

友の思ふの石の

の古謡

父上母上のいふこと

こゝろは行くさう行きませう。

海は長つた馬さうも

微かなさんて行つた

わびしい人とおもひ

而も思ふとあるもの

お國のあめり奉る

物と名うし室下不路の位を指し此と云ふ。あつた不路の
借心証ハ一代男が才一比と云ふのである。不路の借心証も
一時熱心な集めたる。云々本五体と云ふ。仇人が集め
不路の仇方を傳りて掛取つる。ハイアハカハ一因也
十夫て買つ比と自白をぬか。不路をむりエシクタイ
がある。はちうか、言ひ。因。不路の仇路確元家ひある
ことを始めしゆりた。

五月の向集の事。千入入の。後後の。ぬめて
ある。このかいくらある。仇文七一寸おもしろく出来
てある。

瀬戸松山にのり

梅咲くや瀬戸松山漁夫の家



初午、太極、打込、浦、あつた
去の夜や詠しも冬きき。清く湯壺
五月雨やあつた今とす。屋松の漏
やん。堂。足。出。の。馴。深。七。五。六。年。
土。用。と。と。千。才。と。の。さ。き。も。ろ。ろ。も。ろ。
と。皇。指。の。心。配。笑。ふ。五。月。雨。
吟。主。と。我。身。を。虫。の。う。ら。ん。け。り。
か。く。さ。ぬ。ど。も。ろ。ろ。か。く。も。り。こ。ろ。
竹。子。と。と。借。の。氣。出。の。午。睡。が。
七。奉。と。と。よ。七。去。年。の。新。茶。の。り。
我。も。ろ。の。故。帳。の。あ。つ。た。こ。と。可。笑。ひ。け。ん。

大宮の松のり

小雀をふところにも渡さず
鳥の聲はなぬ身はいま
①やれあまのし子海のとを
人浪の右後左様と夜やれ
海の花凡の音もあつた
巖の上のちまのちりあつた

○定月かき棒岳のまを聴く

南時金龍山淡若寺の唯我佛心と棒岳が
古物な中仲間の今も仁まの載りもる古
物の大徳父が納められた我佛心と
今もある本堂の左側の淡若寺の這入つて
堂守もするこころの淡若寺の毎朝



四時の鐘を鳴らす朝の御勤めが始まる
つと淡若寺の鐘の音つと朝の御勤め物
子があつた淡若寺の御勤めが
かき棒岳がまの糸のやれ紐は鐘を
鳴らす棒を引く杖は杖の中は杖
ら魚か浮標を引く杖は紐糸と
くやれ杖の音つと杖は杖の音つと杖
す御勤を上げて杖は今自分が保つて
数程の杖と糸の御勤め杖は杖を上げて
杖の音つと杖の音つと杖の音つと杖
杖の音つと杖の音つと杖の音つと杖
杖の音つと杖の音つと杖の音つと杖

この物語をえんじよの地、教養をいとお見しれり
ローマ字綴りを淡路橋をいよと御手おろし
いかにてもあつた。七人の后流をいよとあつたが橋
岳吹しよとて、観音のうしろに直に地獄をいよ
木の身で穴掘りをすし、いよの狂歌か歌い
くちの地。是等と御手みれば、佛の御手後
誦して居ればいよとらる。

... ..
其の後橋岳の観音の木を佛の淡路を、移つて
所謂淡路を畫十八枚と一揃に、描いて、十巻に
賣つたといふ事、此の地の高家といふ
佛の御手を、折くといふ事、吾人を道中の客の



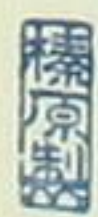
合ひすから、其の地合而白い地をやつたの地
山つて木の湯をやつた、志の地の持つておれ
木の地の男根が傷つておれ、いよの地、志の
地のやつたやうに、淡路をやつた、いよの地
かあつたが、えんじよの地、又橋岳の地、油
いよの地、いよの地、淡路を平の地、ハイウらひ
夫人か、面白いの地、父が、いよの地、おれのを
飯名地の文をいよの地、例の観眼鏡の
軍艦の下を、いよの地、無の地、いよの地、
人が、自分の首、いよの地、持つて来て、其代り
に、いよの地、いよの地、いよの地、いよの地、
えんじよの地、いよの地、いよの地、いよの地、

馬琴の一面、下つて、往彦といふやうな人の歌、
の風味を体得し、人があつたの、観音の傍
び、耳の拾えり、をやくうといふ、及び、
と心、此流もあつた。

○去月、下の港へ遊び、ハリス、海未の折、土地の画家
か、字とい術を教つた、とまゝ、ことを、さ、ま、の、事、蹟
をもつと、委しく、知つた、と思ふ、此、の、寒、日、難、法
又、此、人、の、こ、と、が、委しく、書、か、れ、て、あ、る、以、下、ま、を、お
録、す。

下宮蓮杖の杖

我、四、宮、三、術、の、祖、と、し、て、ま、あ、び、上、宮、彦、馬、江、江、
と、玉、川、三、次、と、ま、あ、び、ま、て、く、ん、と、横、濱、で、杖



杖を、岸、に、下、宮、蓮、杖、の、杖、は、大、正、三、年、三、月、三、
日、九、十、二、日、の、高、嶽、を、以、て、永、代、と、ん、た、此、の、
遺、物、の、一、つ、と、今、も、二、世、蓮、杖、の、傳、り、る、蓮、
杖、の、形、の、彫、刻、と、ん、た、一、本、の、杖、が、あ、る、往、凡、二、
寸、長、と、五、尺、八、寸、と、あ、る、巨、杖、は、此、杖、の、為、り、
蓮、杖、と、い、ふ、節、も、他、か、く、附、け、ら、れ、た、之、来、
ハ、蓮、園、と、い、ふ、節、の、あ、る、杖、

文、政、六、年、二、月、十、二、日、伊、豆、下、田、に、生、れ、た、お、お、ハ、浦、
賀、船、政、者、の、利、潤、屋、梅、田、興、助、に、あ、り、の、三、
男、の、孫、久、し、ゆ、と、い、つ、て、下、宮、家、を、継、い、た、幼、穉、
の、時、か、ら、書、を、ぬ、ん、ひ、十、三、の、年、に、書、の、身、を、ま、
て、や、う、と、お、お、の、家、を、出、て、江、戶、へ、来、た、の、杖、か、せ、て

どうも右をえりも左をえり
切しぬ人けり、己んか志
の書と頼むる心も。任力も或る是れを
不備に任えんが、あつ日一人の死が是と出しとえ
母の寸法を計くせりをもて、病くさうり、是れ
を飛出せし家、ゆり、汗ま下田附の
砲台附の足軒をつとめ、おれ、同心の鹿子畑
あ、ハラの沼へ、狩り、狩り、葦川、法眼、一、
狩り、一の敷、入ること、ようり、初め、志、
此の久し、助、一方、うり、七人、香、丹、
の道、従、比、葦川、女才、杖、を、愛、葦、
一字、取、葦、田、と、ま、野、と、照、つ、
所、同、く、も、お、か、字、と、術、と、身、と、字、の、す、時



様か別来、比、と、ま、の、或、時、旅、本、某、の、家、に、
の字、ま、を、あ、か、ん、え、ん、比、氣、息、が、う、こ、と、
像、か、消、え、と、ま、の、ひ、現、物、か、う、
と、
品、は、彼、ら、と、形、枯、く、大、き、く、銀、を、延、べ、七、板、と、
比、ま、の、ま、え、の、男、子、の、主、像、ひ、あ、つ、れ、ん、を、え、れ、
葦、田、は、其、の、投、の、遠、く、も、葦、の、夜、心、さ、り、
切、り、ま、愛、の、南、の、字、と、術、と、ま、は、こ、と、ま、
志、か、起、り、比、此、時、況、に、業、ハ、あ、い、何、的、ま、
野、を、は、え、ん、と、ま、ま、支、へ、の、ま、い、身、と、ま、り、
此、の、心、先、つ、ま、を、作、り、之、ん、を、比、自、り、ひ、而、し、
を、ゆ、り、之、を、別、い、と、ま、く、も、あ、こ、志、し、

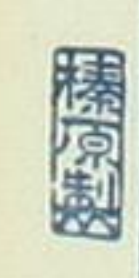
ことを説きやまへり人の心。実存に二冊の巻を
すし書かす此の書は町おめあつたふらに生かす
の旅記に書きたるに寄る也集めたりとのふりし
れ書かす今の文へのちいれ過書にても数ある
かある友の人もして七うめし何れ書かして
くと今更書かす事とて得るふいふ事ありといふ
七而書に親私淑しあ書に働かた書かすの
い而時記に記をいれ出すに比りか、此の記は
ぬめであるかえと漢文の初めをいふつて、
：筆の利いてあるのれは、此の如く二月二日
の自分と奉命末の著述に生んで徳川時代の
ふらふいふ記の初め奉命時代の後記の改定

徳川

を想像しやうといふこと、就て見たりして、徳川初め
の世相を思ふと、真に別世の感あり、別を所
記す此等時をいふ行記の今日かとも老くと一層其
を深ふす。當時の市井に、流侠と云ふは、流侠と云
ふが、古来も通る事あり、此の如く、此の如く、
れよ、少くも、此の如く、江に舟を差す、金の
都合のつくり、位を、此の如く、此の如く、
千を、此の如く、此の如く、此の如く、
か、此の如く、此の如く、此の如く、
木村、此の如く、此の如く、此の如く、
を生か、此の如く、此の如く、此の如く、
合、此の如く、此の如く、此の如く、

を改ちしめあること言ふまじき事い。

自今今昔時の言終に國體と一に叙せんとするの意を
再ら其内の一國馬十連を就し聊々筆紙を減らんと
するの意あり。馬十連は細木香以を中心として起つた一
國であるが、此の國長ともいふべき香以は市時今紀
文と云はんには少しも院んもさういふ豪奢生活をして人び代
に山城海岸の酒屋を営み、其先代から全盛の源氏
をさへも、若くはあつた。其末社にあつた。其まゝの
有るに心柄磨いた人を主人公としてあり、即ち其
の爲兵衛と云ふ道に安んずる人の優名を傳ふと云
ふは、香以七絶の若くは大なること、
勿論市時の名もいれ、九代目國十郎を始め、
源氏



其、源氏師の御方也の名人等此人の恩顧を多きけ
りとのまじり、香以自身七絶の意の通して、画をかき、
滑をよくし、潤達うして快氣あり、秋産を高き下りて衣
とせり、後、春府の鳥居の龍ん、
富川、マルンベン生活をこゝろのめり時、江戸の名士の雲行
に野川さうり角龍が進行、やうと来り時、此等の角龍が
送上香以を合し、土下生をうと香以の礼をして、人々
皆驚ろいれと云ふが、今此文の成りの果、さることあり、此
の凡不思慮の事い。

香以を中心とする馬十連の約十人ばかりの國體で、一統
ある市時が香以を慕つて馳せ共、此のふたりの後、人々
がまかつたやうに、是れも限らず、風俗をも古く、このふたりの

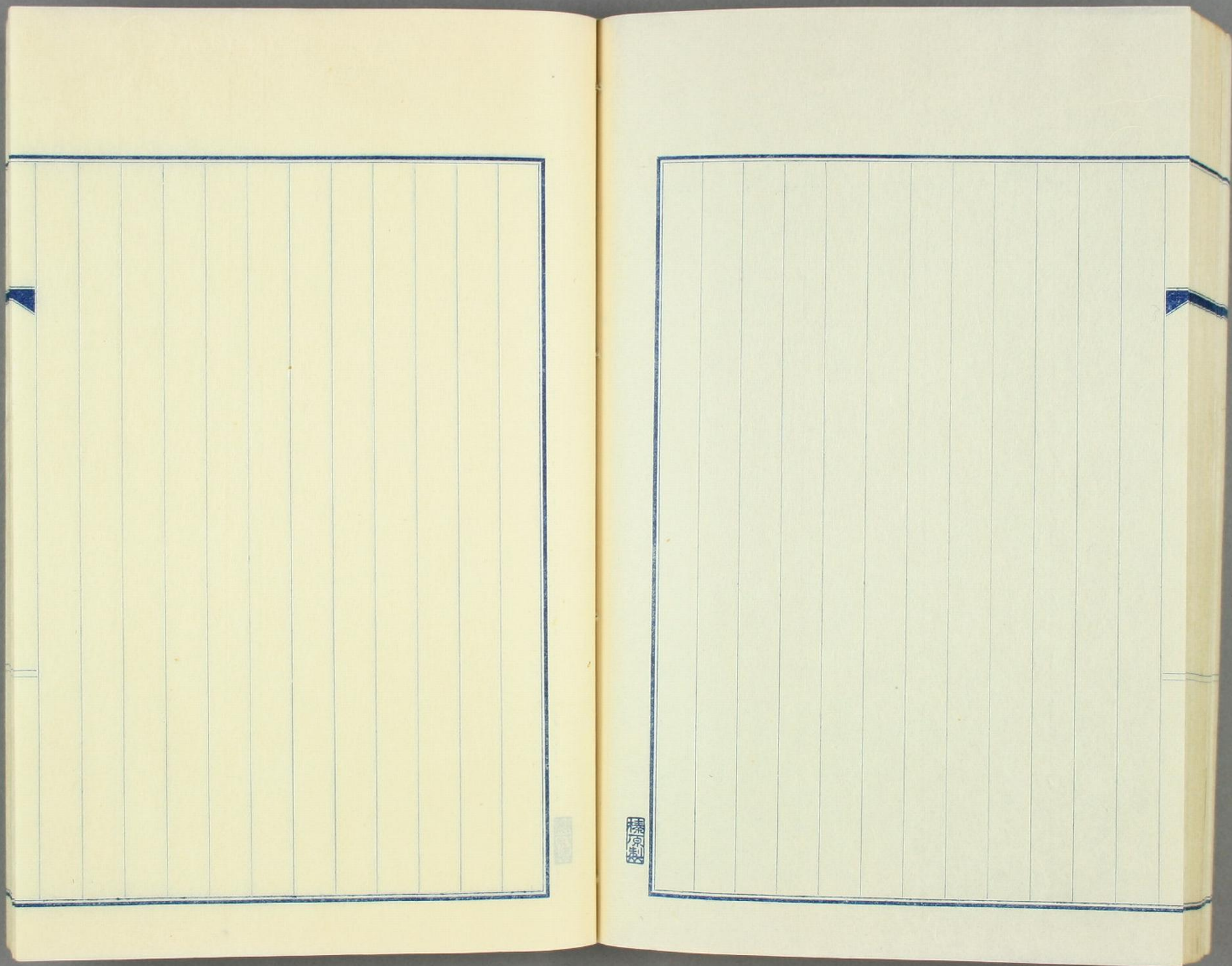
面々十四名ありて皆々諱名が書かれりてみよ、是れ八府殿下りか
秀次の名り置りてその因十なり他所ニ奉仕比名ハ皆此の
ニある。馬十連と云ふ諱ハ社中の一人が常つて成何山奉侍カ
折、太鼓を弄す。一少年ニ合し比が、是れ馬十と云ふ名に彼
太鼓の皮を拂し比の注ぎ出し比の、氣の毒ニ思つて彼
部をも其つて比所注ぎを止めりいのも、土地のよふ心足て、彼
リは多く其つてのこき比うらの事比鳥目を其つてあへしと云
ふのび、若干の錢を其つて比う初めを去るに比注ぎを留
めて深く御禮を言ふ比のび、其つて比人ニ深く感し、比今
さま此古年ハ比を其つてあへ、人間ニ好くあへて候へ
らぬと其口名を其つて國名とし比の比と云ふ。
國中の竹二仙と云ふか時流三十二年頃ツをひとり生さ

流和尼の事あり

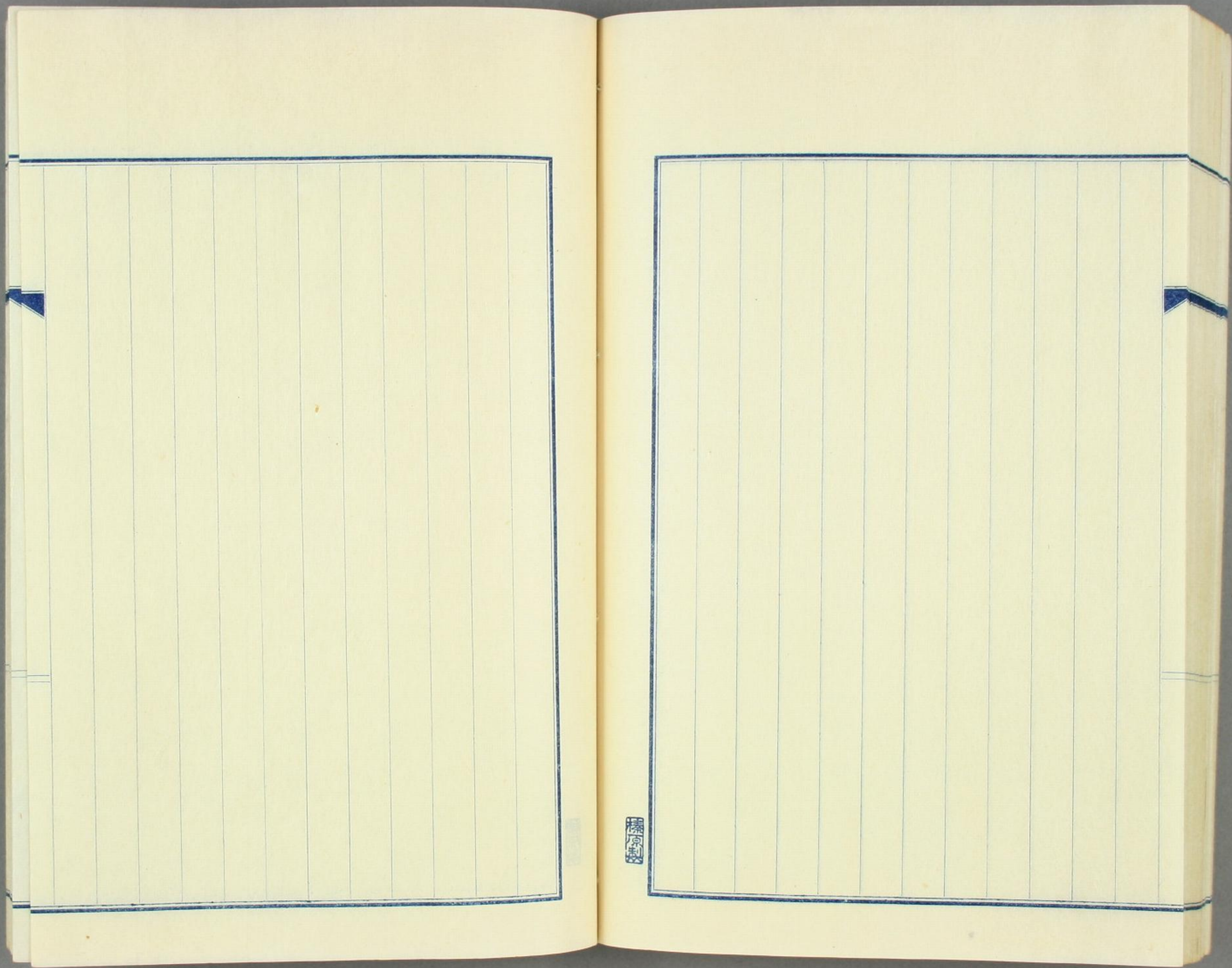


（其り七十七の叙入時より）

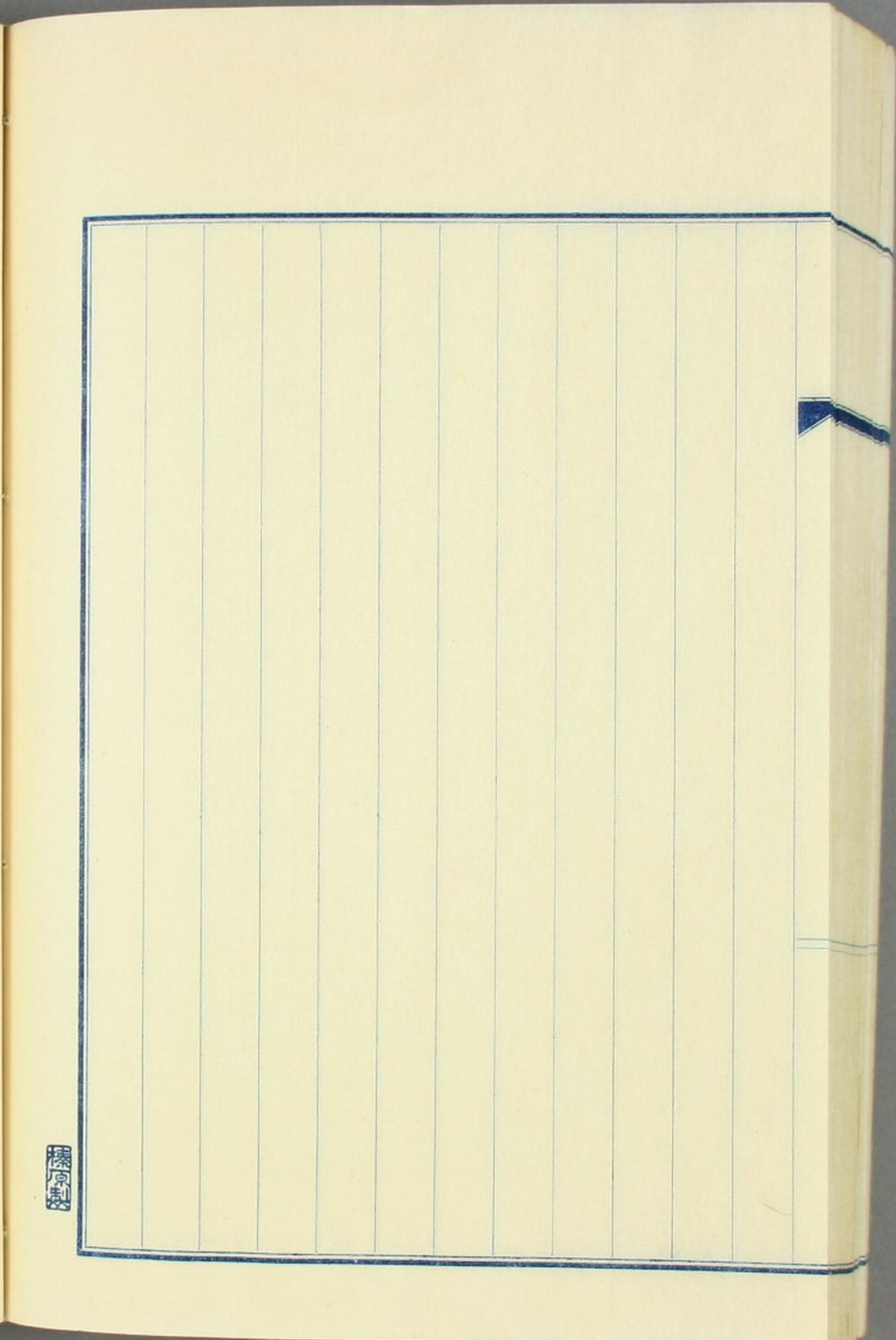
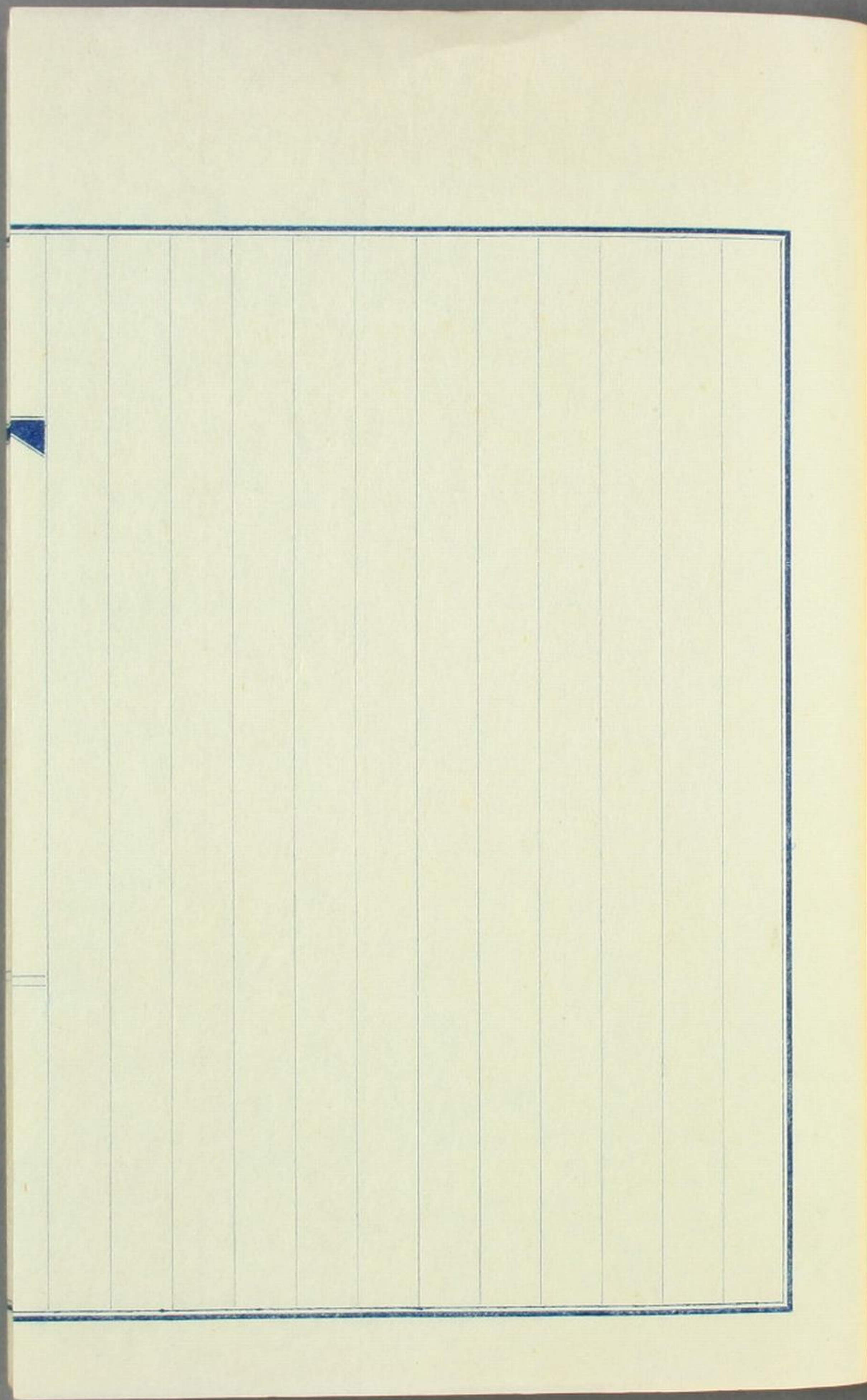
彼の比の叙入の供養身外に、恩と題する二冊の考物
を刊行し、首書は故人の行状を書き、二冊目よりあ
時の名傳から考を此考物歌仙の末を扱ひてあつ、
今ハ此書を訂するも少く、馬十連の名を、とを記臨
してあへてあへるも少く、いひあへると思ふが、江戸風味を
を要んぬり研究し、考してあへる人、此ハ流んを汲ふ
よみか人あへていくもである。自今考を、常つて安田書林會
美ハ能氏（今の長次郎）を中心とし、幸田露伴、林虎村
氏を、欣喜合と云ふを但傷し比ことがあへ、今も四
中習する馬村克平氏等と流る雨の藝術家と共に
日ハ回顧今と云ふを時々聞いてあへ、考を、こ人考小
馬十連の流んを汲ふと云ふあへてあへる。



標原製



標記



今と昔の國雪



市島春城

雪の多く降る歳を雪年野作の兆として喜んだのは、最早昔の語となつて、今は全く別な意味で雪の多いことを喜ぶやうになつた。近年スキーが盛んになつて、雪國が大いに頭を擡げ出した。...

此の遊戯の處となつた。費用借まずどしどし押かける。雪國の住人もかうなるとその心理作用も生活状態も自然變つてこねばならぬ。現に變つてゐるのである。...

は、今は別ね起きて大切な客を迎へねばならぬことになつた。こゝに開闢以來無一一生面が開けたのである。雪國のものは天裕とするであらうが、...

た。自分も實は、このスポーツを喜ぶもの、其益々盛んならんことを祈るもの、冷眼に眺める景色として止むのは除りに...

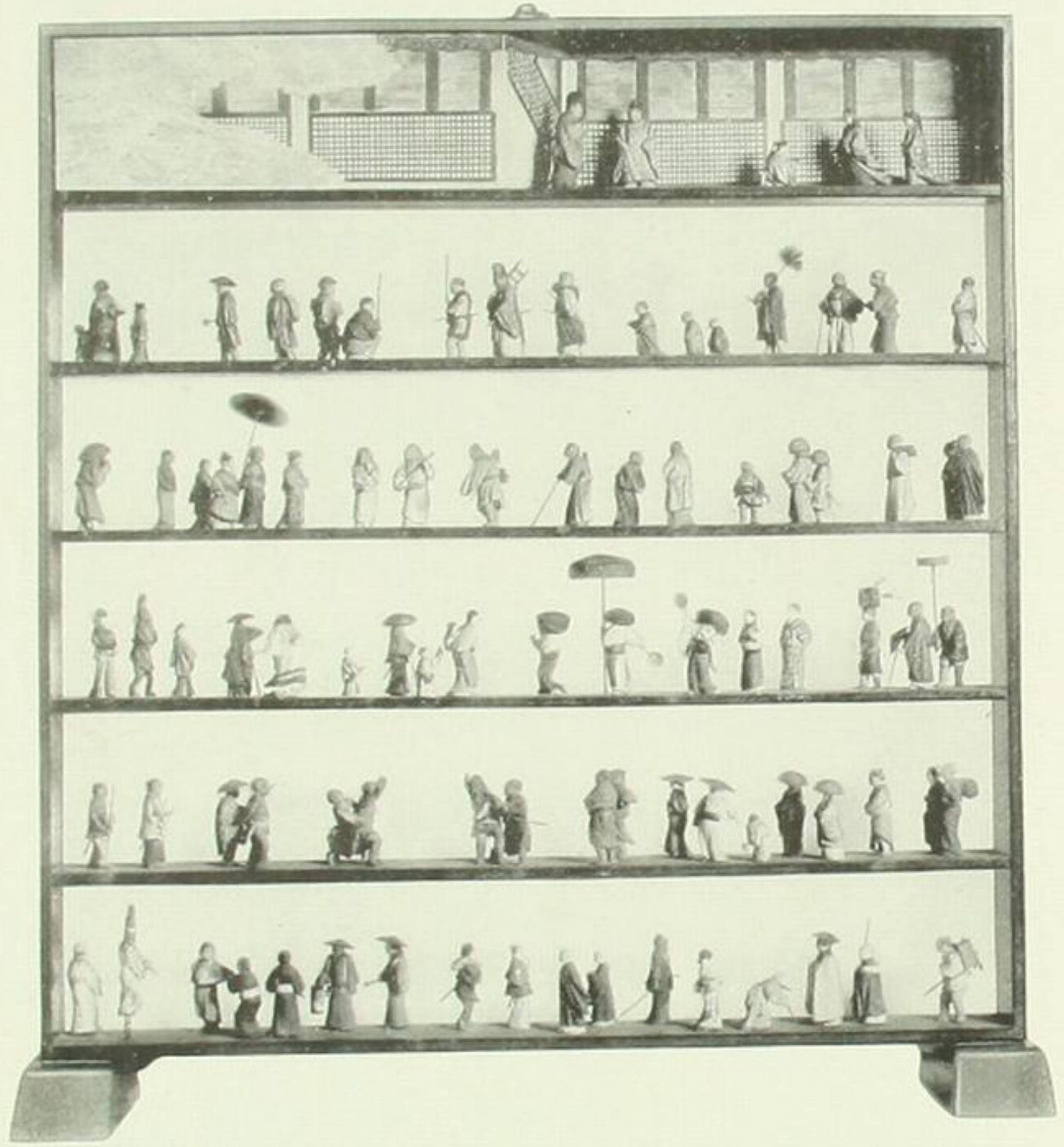
發揚さるゝのもこれからだらう。雪が結晶形をなしてゐることは、今は誰でも知つてゐるが、それがそも、誰に發見されたか...

○田舎の先人のくまの席しんか山村耕花か其の跡
の大津絵を出版し其の概況は左り如くである。

山村耕花畫伯珍藏の大津絵拾幅は六曲の大屏風に懸けられた。その一幅毎に会員の視線をあつめて画伯の説明を求めたのは配膳の前で其の一々に時代の特色が躍如としてゐる。郷土的な素朴で経奇的な會員の顔料を色彩の文に便して華麗味を漂はせたこの市土産絵が今や貴重である



趣味的の骨董化観賞の人々魅するはありていつた一月廿五日此の夜の出席会員は来ん節分会を豆撒の年男を勧められる鑑識なる高松光や翁を始め服部耕花、石川寧三郎、藤原庄主柳原源風、キダ編輯部の西原長康、篠田弘道、斎藤錦太郎、新島次郎の諸氏を耕花画伯の説く大津絵研究の真諦を握った。耕花は大津絵に逸早く興味を持ち蒐集に力めた権威者である。現に展覧の曾の行舟の絵は（片脚を風呂に入れかけて居る顔とに絵とも見られる一團の雪は虎の皮の裸か懸けてある図）尤も珍名にして同氏が入舟の行舟の苦心談に流石蒐集家の心算かうかいたれた。奈良良にて入舟の女座童僧△赤鬼の三味線弾き△遊女△男伊達△宿娘△来馬若衆△春駒△特に大津絵最古と稱する青面金剛等と顔料の泥絵具に就ては同地産の軽石採の石を粉砕して使用せし如く其の原料を送つて世に研究中であると言画伯の物語



享保風人形 百一人衆 京都 久保田左衛門殿御所藏

享保二年、保享、保年一三〇〇刻にて作の生草の慶隆水滸師匠巨の都京
 でのい深結由たし供に賢泰七郎に召の宗吉軍將代八、し成完を之く
 らあの時富、くなでりかほるみでれ優てし三形人り獨はれこ。すまりあ
 。すまりあでのもな重費もで上の證考俗風でのるあてめ集を俗風るゆ

〇是月以來有安尾之海到中の人形、就て自合、皇大
 関、此大之、あ形生誕を祝、了、此、の、就、此、の、儀、況
 有、功、卷、の、福、祿、壽、の、三、個、大、人、形、の、前、瓶、を、開、
 して、み、この、か、城、内、の、慶、卷、を、思、つ、て、み、此、が、今、有、此、
 危、か、く、之、を、未、此、日、此、を、見、よ、と、首、部、又、若、干、揮、
 俗、も、あ、り、が、福、祿、壽、神、の、全、形、す、い、式、に、不、意、思、
 者、去、を、忘、む、事、此、り、も、あ、り、て、か、切、つ、と、事、候、百、人、
 一、衆、が、同、く、さ、う、つ、て、あ、り、と、女、可、さ、ま、さ、ん、の、名、匠、の、心、
 り、自、時、代、七、七、く、あ、時、の、風、俗、を、こ、ろ、造、り、料、も、さ、
 ら、い、か、城、内、の、送、り、と、す、異、あ、り、の、か、
 く、し、と、人、形、が、あ、り、と、ん、又、自、合、の、あ、り、行、さ、る、
 目、入、ら、う、と、い、は、れ、
 〇



ることである。虎屋と云へば必ず饅頭屋を思ひ出すと云つても良い位全国的に通りになつてゐる。だから甘黨が看板見た丈で「ハ、さては名代の名饅頭だな」と饅頭食はない先に聯想を食つちまうから、似てもつかない田舎の鹽つばいゴチ／＼の奴が斷然昇格する事になる。豈饅頭のみならんやであるが目先鋭

兵隊間のみならず地方人一般にも名物として相當評判であつた。元氣にうち満ちた血氣盛りの兵隊達は日曜と云つても、豆腐屋へ三里の此の里のこと、外出する宛もなく良く寄り合ふと誰云ひ出すともなく此の「お虎」の食つこ等やつて興じたものだ。己は十だ何己は二十だ何だ弱い奴等己は四十だと威勢よくせ

が一種の興奮劑を飲むやハイドに一變した、其の有様を想像して見給へ。しかしまさかあんな恐ろしい牙をむき出し毛むくじやらの手に爪をのばし眼光炯々人を射るの形相とは變らなかつたであらうけれど。 たつた今人間彼から發散するが如く自我が抜け去つていつたのだ。そして彼は最早唯一

てスキーヤーの大軍が押し寄せるのでありますが、大抵はグレンテ(スキー場)スキーをやる人が殆んど大部分でありまして、相當の自信と、用意周到な準備を整えた一少部分の人々によつて山スキー(山から山へ)が試みられるのであります。 平島君と山本君との場合は國道から國道へ走る道でありまして、その行程から一番の難所といへば三國峠越えであります、この三國峠を越えてゐる最中に突然に起つた吹雪(十二時間吹き通し)に遭難したのです。 吹雪と一晩中閉ひられた二人に與へられた運命は山本君は、悲しい結果となり、平島君

陥があつたかも知れないが、天氣さへ良好ならばそんな理由は理由であつて理由にならなかつたのであります。 吹雪、吹雪といふ突発的な悪状態に遭遇した最後の結果であるから完く、生も、死も天命であつたのです。人事を盡して天命を待つたのであります、山本君は遂に三國峠の山腹に抱かれたまゝ、悲しくも永眠されたのであります。 生き残つた平島正君の行動は、土地の人々が激稱するほど尊いものであります。これは實によろこばしいことでありまして。

けれども、山本君の體力が刻々と衰へてきました、そして睡り始めたのです。冬の遭難で眠つたが最後です、平島君は山本君のかうした眼りを醒ますために一生懸命に友の名を呼びつづけたのです。頬を打ち、身體を叩いて呼びつづけました。 吹雪は猛り狂つてゐます、その中で、一信責任觀念の強い平島君が叫びつづけてゐる行動は涙ぐましいものがあります。親のやうな氣持、兄のやうな氣持で、この弱り果た友を愛撫したことでせうけれどもたうとう山本君の眼りは醒めませんでした。 朝、四日の朝は明けました。 亂雲を破つて月光が靜かに白銀の世界を照

らし出しました。 平島君はこの機會を逸することは出来ない一時も早くこの急を峠の下の法師温泉に知らせなければ山本君も自分も危険であると直感したのです。防寒着を脱ぎ、それを深い眠りに陥つてゐる山本君の身體を包んだ。足も包んだ。そして自分は手袋を履いてゐる余裕もなくスキーを履くと夜營地を出たのです。手は殆んど感覚がなかつた。けれども峠の下に里の法師温泉まで三十分間で行けるとして山本君も助けられると確信した。丈餘の雪の中を二本のシュプールを残してといふよりも

ちて行つたのです。 法師から十町ばかり手前の地獄谷といふ谷で湯ききつたノドをうるほすために水を飲んでひよつと腹をあげると登山姿の學生が二人コーヒを飲んでゐるのに逢ひました。 平島君はこの三青年に三國峠に、友人が遭難してゐることを告げた。そして、その瞬間彼も自分も助かつたと思つた平島君の體が、三十分位で來られると思つた平島君の體も意識も、その時は弱り果てて四五時間も費してゐたのでした。

したので平島君の肉體がそりしたのではないのです。私は、友情と信念といふことに就いてこんどほど泣かされたことはありません、山本君の身體に自分の着てゐるものを殆んど着せて出るなんて却々出来ることではありません。 宿の主人や、宿泊者の一人であつた凍傷に經驗があつて、平島君の手當をした人が交々語つてゐた。 『手當が悪かつたら平島君も死んでゐたせう宿に着いたときは殆んど脈膊がなかつた。』 私達は、この事を聞いてどんなにかうれ

和歌

源三郎先生選

〔初日〕 天 月 洲 地 鳥 天 狗 静にそ映す

初日 選者吟

立ちならぶ御旗のかけを登校の兒等は初日をあびつゝもゆくをろがめば日嗣の皇子の生れまし、千代田の森に初日かよふはれ渡るむさし國原の末に初日に匂ひそ、りたつ不二 街遠き家居静けし野を越えて折々ひびく羽根の音をきく

返事なけれど心は讀める 同 膝に落したひとしづく 同 初孫を抱いて世間に添はせてやつた 同 意地を笑つて見せる膝 スミ子 抱いて寝る膝別れりや他人 同 未練を追ふ様な夢もない 同 共稼ぎ夫婦築しく夕餉の膳に 同 膝つき合せて取る食事 四疊半 母さんの膝に抱かれて軍服姿 同 坊や小さい愛國者 同 手膝で立つたる坊やでさへも 同



三國峠遭難に就て

竹田 高俊

遭難事情

平島正君と山本一男君とが冬期休暇を利用してスキーによる三國峠走破を試みました。三國峠とは、上州と越後との境界であつてこの地方は山の高度は餘り優れては居りませんが日本海を渡つて吹きつけるシベリヤの寒風を受けて陽春の頃も深い雪に閉ざされてゐるところであります。

で、冬から春にかけての上越國境に向つてスキーヤーの大軍が押し寄せたのであります。大抵はゲレンテ(スキー場)スキーをやる人が殆んど大部分であります。相當の自信と、用意周到な準備を整えた一少部分の人々によつて山スキー(山から山へ)が試みられるのであります。

平島君と山本君との場合は國道から國道へ走る道でありまして、その行程から一番の難所といへば三國峠越えであります。この三國峠を越えてゐる最中に突然に起つた吹雪(十二時間吹き通し)に遭難したのであります。吹雪と一晩中閉ひられた二人に與へられた運命は山本君は、悲しい結果となり、平島君

は自然の恐怖すべき、試練に遭けられつゝも萬死に一生を得て法師温泉に從容されたのであります。猛烈な凍傷と、極度の疲労とで平島君自身の生命も危まれたのであります。幸ひ強健な體力は、この危難をも避け得たのであります。

友情と信念

此度の遭難は、吹雪による不可避的な性質のものであつて、結果から論ずると種々な缺陷があつたかも知れないが、天気さへ良好ならばそんな理由は理由であつて理由にならなかつたのであります。

吹雪、吹雪といふ突発的な悪状態に遭遇した自然の苛酷な攻撃に十二時間も抗して努力した最後の結果であるから完く、生も、死も天命であつたのです。人事を盡して天命を待つたのであります。山本君は遂に三國峠の山腹に抱かれたまゝ、悲しくも永眠されたのであります。

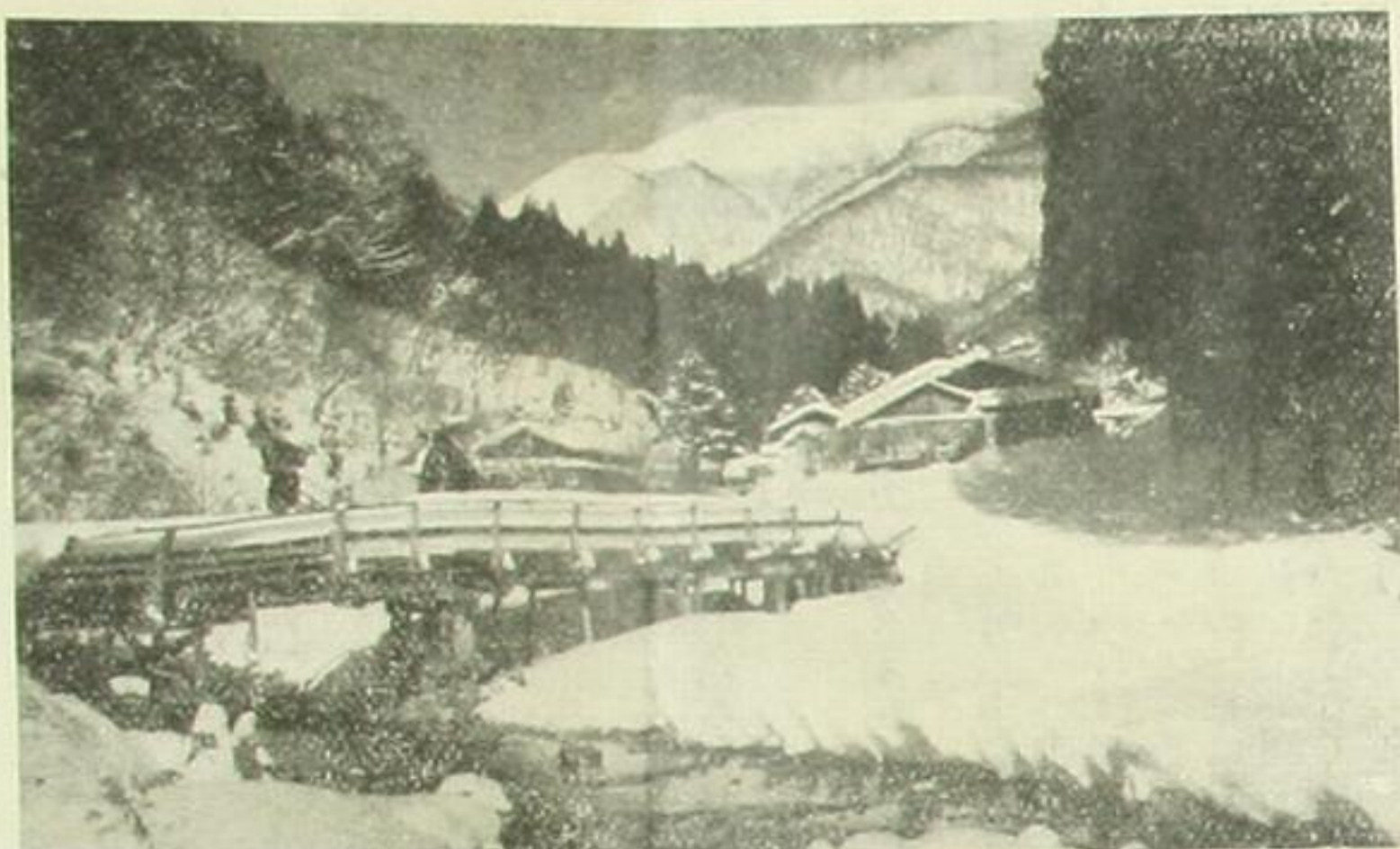
生き残つた平島正君の行動は、土地の人々が激賞するほど尊いものであります。これは事實によるこぼしいことでもあります。

眞暗な夜營地の身を裂くやうな寒氣と、悪魔の叫びのやうな吹雪の中で、相抱いて激動して睡魔からのがれようと試みたのであります。

さゝやかなコップフェルの火で體温を保たうとしました。アルコールが絶えてからはシャツも燃したのですけれどもそんなさゝやかな火は猛烈な寒氣や、吹雪の中ではどうにもならなかつたのです。ウイスキーの最後の一杯を凝視めながら彼らの二人の心に映つたものはなんだつたでせうか、父や、母や、兄弟姉妹のことだつたでせう。さうして、この人々のためにでも、自然の追撃に對して最後まで戦ふ氣迫であつたに相違ありません、さうしてどうしても生きねばならないといふ覺悟だつたでせう。

けれども、山本君の體力が刻々と衰へてきました。そして睡り始めたのです。冬の遭難で眠つたが最後です、平島君は山本君のかうした眠りを醒ますために一生懸命に友の名を呼びつづけたのです。頬を打ち、身體を叩いて呼びつづけました。

吹雪は猛り狂つてゐます、その中で、一人一責任觀念の強い平島君が叫びつづけてゐる行動は涙ぐましいものがあります。親のやうな氣持、兄のやうな氣持で、この弱り果た友を愛撫したことでもせうけれどもたうとう山本君の眠りは醒めませんでした。朝、四日の朝は明けました。亂雲を破つて月光が靜かに白銀の世界を照



らし出しました。平島君はこの機會を逸することは出来ない一時も早くこの急を峠の下の法師温泉に知らせなければ山本君も自分も危険であると直感したのであります。防寒着を脱ぎ、それを深い眠りに陥つてゐる山本君の身體を包んだ。足も包んだ。そして自分は手袋を履いてゐる余裕もなくスキーを履くと夜營地を出たのです。手は殆んど感覚がなかつた。けれども峠の下里の法師温泉まで三十分間で行けるとして山本君も助けられると確信した。丈餘の雪の中を二本のシュプールを残してといふよりも殆んど轉落するやうに谷に向つて進三無二落

ちて行つたのです。

法師から十町ばかり手前の地獄谷といふ谷で湯ききつたノドをうるほすために水を飲んでひよつと水をあげると登山姿の學生が二人コーヒーを飲んでゐるのに逢ひました。

平島君はこの二青年に三國峠に、友人が遭難してゐることを告げた。そして、その瞬間彼も自分も助かつたと思つた平島君の體が、三十分位で來られると思つた平島君の體も意識も、その時は弱り果てて四五時間も費してゐたのでした。

萬目皆一色の清浄な雪の山腹に抱かれたまま、山本一男君の靈魂は呼べど歸らぬ旅にのぼつてしまつた。友の生を信じてゐた。平島君にとつてはどうしても信じきれないことだつた。

「フアキニテソウナンホウシニシユウサルヒラシマ」このやうな電文を社に打つたのも山本君も助かつたからと信じてゐたからだつた。けれども四日の夜になつて山本君の死が、凍傷に兩手兩足をやられた平島君の耳に入つた。山本君の父や、弟さんが五日の朝早く到着するまで一晩中慟哭してゐた。

「あれが、男泣きつて云ふのでせうな、一晩中泣いて居られました。けれども、平島君は實に立派な態度であつた。たとへば地獄谷で學生に逢はなくても、この法師温泉までは必ず來たでせう。それは、どうしても友を救はねばならないといふ信念が平島君を動かして

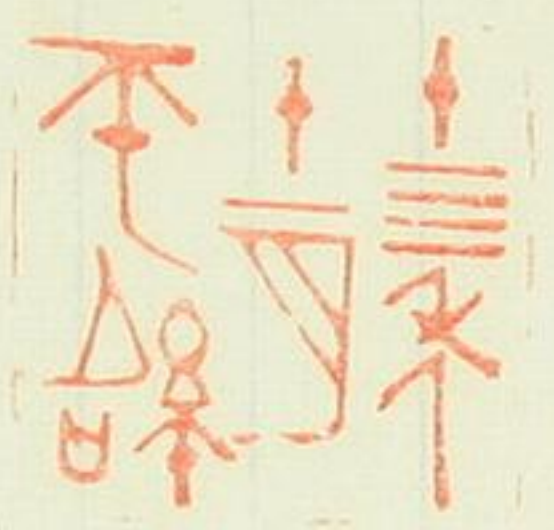
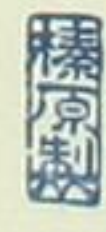
ゐたので平島君の肉體がそうしたのではないのです。私は、友情と信念といふことに就いてこんどほど泣かされたことはありません。山本君の身體に自分の着てゐるものを殆んど着せて出るなんて却々出来るのであります。

宿の主人や、宿泊者の一人であつた凍傷に經驗があつて、平島君の手當をした人が交々語つてゐた。「手當が悪かつたら平島君も死んでゐたでせう宿に着いたときは殆んど脈膊がなかつた。」私達は、この事を聞いてどんなにかうれし泣きに泣いたことだらう。

薄暗いランプの灯の下に友の死を悲しむ平島君の雪襦袢のした顔をこれほど親しみをもつてながめたことは日常同じ仕事場に働いて居りながら且つてなかつたことである。

三國の山々は晴れたれど、私達の心は晴れなかつた。一人の友を失ひ、一人の友は恐ろしい凍傷にやられてゐる。けれども、一刻も早く凍傷の手當をしなければならぬのだ。平島君の父君と弟と私達三人(平井氏)と病める平島君を箱籠に乗せて、萬感交々三國の街道を東京へ向つて歸つてきた。まだ、書きたきこともあり、書かねばならないこともあるのであるが、限定されたるニュース紙上では到底満足のゆくまで書き得ないのであるが、友情と信念といふ言ふに易く實行するに難い事實を、平島君によつて見せられたことを感謝しつゝ、發表しうることを光榮に思つてゐる。

其代の社名一名人キシの以命を三四時と致す
 幸ひ一人生を得たり七と候地生人の事四二
 魂魂を以て其難の原因の一二雪四時雪の危殆を
 忠誠を以て一所以か一人の更生を得たり今く若後
 の病を以て一人と凍傷を醫治するに微は
 の湯を用ひ或は焚き火の暖を以ておぼれり
 偶に湯沸きの処寒に候ありしに故令に長令に
 雪を以て凍傷を感んば摩擦し冷火を以て
 身体を扱すにエソリ等為凍傷を免れり
 此の印刷の記しを以て他は皆印刷記しを以て
 〓



香永堂主人印

秦 和 印

文云

十四年
十一月
雪給

安田善次郎

銅質

漢鏡に似たり
扁平なる鈕
又飾りあり



最も買れた二月新書
 益げ樹馬車
 東洋母
 竹田安吾子
 歌の歌多き
 アラソ
 ハリジュ
 花賣むすめ
 川畑文子
 淡谷のり子
 月曜、カクゴ
 月曜、カクゴ
 付申上げます
 六四五五東京電話

コロムビア
 コロムビア
 各都本日より
 発売致します

また隣は一度もかたし
 かし日本隣ははげと海軍の力
 難敵である。もし日本が一三
 五、六年の危機において

佛獨を牽制する

必要無効に感じてるのなら、
 イタリイとの提携も必要であり、
 かつ効果もたであらう。しかし日
 本の國際的危機は如何なる程度
 から見て、寧ろ牽制を欲する
 ことが觀察の位置とは異なして、い
 ひ。かつイタリイも露國に
 ついては露國と共同して日本
 に牽制をつつけた國である。
 イタリイが露國を牽制すれば
 別とするも、今直に露國の獨立
 といふ點を認めて日本と協力し
 西洋本邦に牽制することには、露
 國に基く本邦を牽制し得ること
 とを思ふに、左船としての
 交を厚とするの必要は認めらる。
 九三、五年の日本の國際危機
 を自指して大なる期待をかけ得る
 國ではない。

廣告

感神を告別の辭として本紙記者
 に左の如く語つた。責任
 としての自己意識を益々深めつゝあ
 る。しかし過去に打ける日本の
 國際危機に感する大なる苦悶的
 物質的形勢の時代に入りつゝある
 この進歩は國民の前進的動機と
 的傾向によつて定められる間に
 更に更に進められること懸念であ
 る。日本は如何なる一つの國
 際的の占有財ではない、それは
 運たにかいてそれを作つたすべて
 持つことを予は懸念する。
 日本は神は前進的動機形式で、願
 望されなければならぬ、然ると
 更に青年の上に着しき努力を興へ
 ることが出来、日本の老人は進
 歩を急ぐ。日本は
 すべての國民に對して、一部の
 少數者にのみ限るべきものではな
 い、しかしその進歩的
 性において日本を安全に近代世界
 に引入れたとて、若し人々は國
 際的進歩的動機に何物かを加へ
 るべき同じ進歩的動機を有するもの
 である。
 日本は若し男女のうちに前より
 も一層自己實現の力、客觀的進歩
 的動機を益々深めしつゝあるのを
 見て予は感々感嘆した。たゞであ
 る。過去において日本は國民の前進
 的動機を益々深めるに當り余りも
 多し。内閣の動機及び進歩的動機

(一) 第一萬七千八百三十一號 (三)

道遙老博士が舞臺監督



- ◆ 新橋演舞場で前進第一日から、赤十字會旗城差
- ◆ 且、夜を上演する。三十二日午前十一時から其の
- ◆ 舞臺監督を行つたが作者の坪内逍遙博士は老練
- ◆ を熱海からわざわざ出て来て身振り手振りよろ
- ◆ しく熱心に舞臺監督の指導を行つた。眞實は指導
- ◆ 中の坪内老博士國太郎の演舞、しず江の千姫

海 報 社 刊

第一九三九加八號

○奥かの三春ゆきも名高い坂具心は傍後うら田村
の甲奥村征伐の時、法久寺の傍、田路がたき
跡を刻んて其へ此のまが多数の騎馬武あり
化現し味方の甲板を助け比とていふ。そんなこと
でなく、坂具心といふ心ある。比とて又日向の鶴
車といふの朝解の一物、他人が百果のちあき
の達し比を長びを現りす為り、作つれのが初めを
あるといふやうな、七とを比とていふく、未歴かあ
つて坂具、確実いそこ、雨の白味かある。

飯後、刈羽即ち柳村の毎年、新米のお祭か行
いん村の子供は、丸火を二つ、おつて角をつけれ、牛の
現具つを送つてつ口を引いてあふく、この牛の鼻

坂具心

傍の赤い靴、白の靴と区あせ、雨の形の、そのむき
ること、埃吹き、お月か、おこえ

あけしは、江戸に纏や様子の、おもとやが、やが、やが、
の、火、か、江戸の、花、び、の、文、鳥、が、持、て、比、り、う、の、ま、だ、今
い、ま、の、か、ト、ン、ボ、と、ま、の、味、細、子、の、お、も、ち、や、が、あ、う、れ、細、い
牛、片、の、真、中、へ、回、し、く、牛、の、串、を、さ、こ、ん、丁、の、字、形
う、り、と、ま、を、お、ま、む、こ、う、つ、と、ま、く、上、け、お、も、ち、や、が
お、シ、テ、ま、の、中、時、の、現、自、身、か、必、く、比、と、の、む、き、あ、る。

昔、い、ち、や、は、ん、と、ま、の、現、具、か、あ、う、れ、大、き、さ、の、二、寸、は、の、り、
大、体、か、織、の、鑄、と、の、ま、う、り、と、ま、の、ま、ん、こ、差、の、い、か、子
の、板、か、一、枚、つ、い、て、あ、る、こ、ん、を、口、に、あ、ち、ま、り、吹、き、こ、も、ま、
と、の、ハ、ガ、子、の、板、を、指、先、で、動、か、す、と、い、ち、や、ボ、ン、と、

・松而白い音をきかす。今般般、あるキヤゴン
とよのか北の玩具のあまこん、似比よか世界の
各方面にある。

○淡路島の玩具十徳云々

トイ、ランドの自由平等の樂地云々

各自立、平和云々

縮少して世界をえることをい

冬地の人保を切つて使ふ

皆其留まらるゝと成る

沈黙して唯静也

同志と雨座よに静也

其物とて求ぬとて静也



依之我を教ふる

年を忘れしむ

○天遠とよよの浮世冷の力がと花のそ青いれこと
ハ言ふまじきもの、浮世冷の又あつたる画家も思ふ
才書ありあつてぬもの、いれみれ、田山彦彦の
ハ勿論だが自分かつたれのでせいろ、ある、宿屋の
も武治のひも皆書いとある、婦人の陰毛をも描き
ことか難いとおつて、名家のそおや粉をの敷を
揆すと性々見ること、ある、あつ山崎ハ淡路地
巻の描しは春書を見たと云ふれれ、自分七回
い人が世の陰毛を粉細き青いれのと有つてみれこと
かある、海邊を華山と云ふ、春書を書いと云ふ

其の法「富画堂日記」左の如き記すかある

十三日不覚時直殿摸春画午後成草画

一枚入湯夜直摸春画誤俗談予刻半

過録

八月^日終日画春画午後日上日暮上刻休

夜降来

白草と春画を掛しそみるるをうろく氣樂すよ
に畫家なるものあんを能くせせぬ各手と云はんを
つに後我の圖をど肉體の模範るよのうのから
實家は世俗のいさくとも内と外といふ大なる陰
石をい春畫好まかみで強いのうくの人と書かせれよ
此



○佛像のふいふを數十張 昔は集りて漸く千をぬの
つたつ折物とて分れ雷神の木彫りたつ三寸
計りまねたふの時代あり 心もろくろく移るも
あり、ろくろく答もろくろくあり、よもあつた
嬉心入ん比。架守りまの改：二王天か二三行あり
湖底の像や鬼の冥念佛 増設 増設あり
ひある、仙佛とてあをる はしはの 外は地方のよか切
つて其味があるやいな思ふ

○岩谷の波の馬のゆへ生れたとまの馬の坂を
七千七葉のて一版のをもつときまの宮の御人をも
慕つたことあり、まが短く比をよんほどつた
つに、まゆくと、院にまゆとんルとてらぬ、こん

あつて、さういふことには、波の研、母、床、を、まき
り、集め、た、と、あ、い、ん、さ、ま、か、く、興、味、を、し、て、か、い
ま、い、ち、ん、ん、か、二、三、を、鑑、以、上、も、あ、る、さ、う、い、ひ、ま、い、か、い
日、を、印、さ、ん、と、さ、う、い、ひ、ま、い、か、い、を、得、た、。

藤田

廣井君と余

市島謙吉

廣井社長の計を聞き、廣井に堪へず、取手道徳の小文を貴紙の二階に掲げたが今日の雑誌に越り越ることが出来ないので、空しく東京に於て君との交はりを追憶し、せめての思ひ遣りを再び貴紙に寄することにした

君と交はり、君との交はりも五十年を越してある。君が學を修めた母校は既に創立五十餘年を過ぎ、君はその第一期生である。

立派な圖書館が出来たが自分は十數年その分が新聞新聞の主筆時代には、君は既に卒業して今の新聞を經營して居られた。その經營が如何にも行届いて吾等をして驚嘆せしむるものがあつた。接見者として君と自分の提議もこの時から初まつて居る。

君との交はりから生じたことである。自分が新聞に任りし日は血氣時代で政治に熱中したが、君や川上君も亦政治に大なる

二度の修約改正運動、大同憲法に對する反對運動等々、政治は益々激烈となつて、君は或る大切の時機に中央に飛び出して政争の渦中に投じたが、保身修徳に留つて放逐さるゝ情事も起つた。この間のことを

分は大患後、政治を斷念したが、君は實業に身を寄せても尚且つ政治に熱い興味を持ち、政黨人としても終始した。

成業の後、郷里に歸つて終始した。は郷里のため大なる仕合せであつたといはねばならぬ。併し君の如き、政治に志の任つた人が、地方に一生を送つた事は果して君にとつて損得孰れであつたらうか、若し

君が、新聞より君を初め、川上見田、上野の如き傑才が揃つて入學されたのを、驚に感じるとしたものだ。君と自分の交はりは既にこの時から初まつてある。君等が在學中に、新聞の編輯は、今も存続して自分がその會長の座を汚して居る。君等がオウツト、マナーで居る。君等が基礎を固めて、後日

自分が老年に及んでも、しばしば貴紙に愚説を掲げ、それが幾百回に及び、随分貴紙を苦しめたのも、

自分が今悔む起す、同好會を組織

追憶

努力

都門

へるのも面白いことである。玩具に限らず、西洋の工藝品を遊び
彼の特徴を知ることに興味がある。近年農民藝術など云ふて西洋
から種々の玩具に近いものが輸入されてくるがそれに面白いもの
がある。日本にも西洋に倣ひ農村の藝術品が市上に現はれてゐる。
此れと彼れとを比較して見るのも一興である。西洋人好の輸出玩
具には多少の工風があつて外國の臭味のある所に味がある。すべ
て新案の玩具には多少取るべき所があつて、往々食指が動く。

☆

玩具をいろいろ集めて見て自分の懐たらないのは精作の乏しい
ことである。もと／＼小兒の一時の戯れに供し、破壊に委するも
のであるから、精作のないのも當然である（或る例外はあるけれ
ども）そのみならず唯だ兒童の遊戯の具であるだけでは物足ら
ない感じもする。何か實用的の役目のあるもので玩具に近か
いものが随つて欲しくなつてくる。それはどんなものかと云へば、文
房の類などは日本でも西洋でも抵ね玩具のやうに作られてゐる。
小さな置物は玩具に近いものであるが、それ／＼役目があつて
名工の精作が少なくない。これ等は大人の玩具と云ふてもよいも
ので、實は大人も玩具を愛するものである。だから玩具と玩具で
ないものとの限界は實際に於て甚だ定め難いものであることを往
々にして感ずる。自分は曾て多くの骨董を玩んだ経験もあるので、
段々漁つて行くと、結局骨董趣味に逆戻りをして、玩具と離れて
行くやうになつたが、どこまでも小品本位である。但だ精作で無

くある。記念品として銀の小器が或る儀式ジミク宴會に配さる、
習慣もあるので相當意匠を凝したものである。併し何と云つても
帝室の御紋章入りの銀器が精作でもあり權威もある。外國製でも
なか／＼佳品があるが、葉巻だの杖の頭の彫刻物だの耶穌の像な
どに美作がある。日本から外國へ輸出する銀器には、下駄や履、
提燈などの形のものが出来てゐるが、それは皆胡椒の容器となつ
てゐる。支那にもいろいろの銀器が出来てゐる。中には全然玩具
であるものもある。銀器も色彩の取合はせに必要を覺えるが、餘
りにこれのみを多く集めると俗氣が架上に漲るので、百ばかり集
めて今は餘り歓迎しない。銀器よりも一段趣味を感じるものは珠
玉で作られた小器である。これにもさまざまのものがあつて、自
分の愛してゐるのは翡翠の小香器、紅仕の樓船、珊瑚の花盛など
で精作を得ることは甚だ難い。水晶の器物はいくらも得らるゝが
これも俗氣のあるものだ。

☆

最も高い趣味に屬するものは佛像であらう。骨董趣味の最も豊
かなるは此方面にある。佛像は割合に小品が多く、如何にも多様多
般の形式を具し、六朝佛西藏佛それ／＼趣が異なつており、鑄像
もあれば土製もあり、木彫もあり、其の佛を納める厨子にもさま
／＼の意匠があり、佛具にもさまざまのものがあつて、多くは精
作である所に興味がある。自分は最も力を此方面に集注して佛に

ければ懐たらない所から、趣味が向上もし、且つ容易に手に入ら
なくなつた。

小品の内玩具に尤も近いものは根付である。これは澤山にあ
るから求め易く、そして精作が多い。今は餘り實用に供されな
いが、或る時代に下ケ物が流行した頃には、名工が精根を凝らして
作つたものであるが、自分の喜ばない一點はもと／＼置物として
作られたのでなく、帯に挿んで轉々其趣をなすやう出来てゐるも
のであるから、架上に置くと坐りがわるく、一見直ちに根付と見
へることが氣に喰はぬ。併し此類には取るべきものが少くない。

自分は一時根付から特に玩具に近いものを漁つたこともあるが、
根付趣味の人に嫌はれるやうなものに、却つて意に適ふものがある。
それはどんなものかと云ふと、二王天などは稍々根付として
大に過ぎるものだが、却つておもしろい。鉦だの釜なども根付と
して人に喜ばれないものだが、根付だけに流石に精作である。栗
の實、鯉貝など實物ソックリで眞を亂るの趣がある。しかし此類
も餘り多くを食ると俗に陥るから厳選を要する。

或る時は箱の類を集めたこともある。御物の袈裟箱を名工が縮
模したものや、法隆寺や藥師寺の古材で作つた小篋や、支那人が
蝨を入れて懐中し、其の音を聴く、金網の箱などもある。或る時
は高獸魚貝の類のみ集めたこともある。牛馬羊犬虎獅子象鹿を
始めいろいろの魚鳥蟲類など、この國にも文具や置物に作られ、
工藝的特徴もおのづからあり、小品蒐集の科目たるを失はぬ。
又一と頃銀器を集めたこともある。これは小品として割合に多

關するものを多方面に集めたいと思ひ、閻魔像、二王天、羅漢像
鬼の念佛などまで漁つてゐるが、恐らく自分のコレクションの内
で、多少見るべき者がありとすれば此一類であるかも知れぬ。

漫然蒐め始めてから六七年経るが、僅かに千五百點位で最早置
き所がない。それがため昨年あたりから蒐集を見合はしてゐるが
自分の小品癖を聞き知つて、遠くから寄せてくるものもあり、外
國歸りの知人が土産に持ち来るものもあつて、追々に数が殖え
る。自分が旅行などに出ると、何かと云はず地方色のある工藝品
を持歸するので、これが爲めにも幾許か數が加はつてくる。自分
の蒐集は範圍が廣いから蒐集は際限がない。世のコレクターにも
種類があつて、一種の物に限つて蒐集する人がある。達摩ばかり
集めたり馬ばかり集めるなどは此種のコレクターに屬する。此頃
もある好事家が苦心して集めた陶器の蓋を數十點賣りに来たもの
がある。可なり鑑識のある人の蒐集らしく佳品もあつたから九個
を選んで架中に列したが、實は一種類のものを多く集めると物次
第で研究の資料ともなるが、兎角數を食ると面白からぬものも交
るので、自分は一物に偏する遣り方を欲しない。自分の蒐集は或
る研究に資すること高尙の意義があるのでなく、唯だ自己の趣
味に投ずればそれでよいのであるから、學術的クラシフィケーシ
ョンなども設けてゐない。唯だ世界各國の工藝の一端を小品で知
り得ればそれで足れりとするのが、自分のせめてもの心がけであ
る。



新 潟 県 産 竹 塗 器

新 潟 県 産 竹 塗 器

郷 土 講 座
— K Q —

新潟名産 竹塗の由来

後六時
廿五分

新潟縣立
圖書館長 村島靖雄

新潟縣は漆器の産地に富みまた其器は多くの特色を有してゐるが最も廣く世間に知られてゐるのは恐らく村上の雄朱漆器と新潟の竹塗とではあるまいか。抑々竹塗は舊幕府御用御用師「はし」事橋本市 藏が明治の初葉片會布後に發明して世間の好評を博した所のものである。此の竹塗がやがて其弟子達の手によつて諸方に傳へられることになつたのであるがわが新潟へは長谷川松洲といふ弟子が明治十八年東京芝居の壱方として一行と共に來込んで

來た時に初めてこれを傳へそれが終に新潟名物の一として今日の盛況を見るに至つたのである。

松洲はそれから引續き新潟に定住し其の師匠小島兼壽の入門となり其の能手であるところから夫婦で遊藝師をなし明治廿八年二月四十八歳で歿した。越えて大正十一年其廿七回忌に際し兼壽の七回忌を兼ね門人有志の發起で十一月八九日大鶴座で盛大な追善演藝會が催され且つ又この夫妻の爲めに立派な比賣碑が寺町通寶藏院の境内に建られた。

新 潟 県 立 圖 書 館 蔵

